

ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教
シノダリティに関する世界代表司教会議の手引書（Vademecum）

各地方教会における聞き取りと識別のための公式手引書
各教区・各国司教協議会における
第1フェーズ（2021年10月～2022年4月）
2023年10月の世界代表司教会議 総会に向けて



世界代表司教会議
バチカン

発行：シノドス事務局長
Via della Conciliazione 34, Vatican City
2021年9月

シノドスのための祈り *Adsumus Sancte Spiritus*（聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立っています）

第二バチカン公会議のすべての会議は、*Adsumus Sancte Spiritus* という祈りで始まりました。ラテン語の最初の語は、「聖霊、わたしたちはあなたの前に立っています」という意味です。これは数百年にわたり、公会議、シノドス、他の教会会議で歴史的に用いられてきたもので、セビリアの聖イシドロス（560 年頃-636 年 4 月 4 日）によるとされています。わたしたちがこのシノドス的なプロセスを受け入れるにあたり、この祈りは聖霊がわたしたちのうちに働くようを招き、それによってわたしたちは恵みの共同体、恵みの民となるのです。2021 年から 2023 年までのシノドスの旅のために、以下の簡易版¹を提案します。どのようなグループや典礼の集いでも、より簡単に祈ることができるでしょう。

聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立ち、
あなたのみ名によって集います。
わたしたちのもとに来て、とどまり、
一人ひとりの心にお住まいください。
わたしたちに進むべき道を教え、
どのように歩めばよいか示してください
弱く、罪深いわたしたちが、
一致を乱さないよう支えてください。
無知によって誤った道に引き込まれず、
偏見に惑わされないよう導いてください
あなたのうちに一致を見いだすことができますように。
わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、
真理と正義の道を迷わずに歩むことができますように。
このすべてを、
いつどこにおいても働いておられるあなたに願います。
御父と御子の交わりの中で、世々としえに。
アーメン。

¹ *Adsumus Sancte Spiritus* の原文は、シノドスのウェブサイト（www.synod.va）にある。

手引書

1. はじめに

- 1.1 本「手引書」の目的
- 1.2 シノダリティとは何か：本シノドスの背景
- 1.3 本シノドスの目的は何か：シノドス的プロセスの目的
- 1.4 本シノドスのテーマーとともに歩む教会のため：交わり、参加、そして宣教
- 1.5 地方レベルでの経験

2. シノドス的プロセスの原則

- 2.1 誰が参加できるのか
- 2.2 真にシノドス的なプロセス：傾聴、識別、参加
- 2.3 シノドス的プロセスへの参加態度
- 2.4 落とし穴を避けるために

3. 本シノドスのプロセス

- 3.1 教区フェーズ
- 3.2 各国司教協議会と東方典礼カトリック教会シノドスの役割
- 3.3 大陸フェーズ
- 3.4 シノドス総会
- 3.5 履行フェーズ

4. 教区における本シノドスの旅の歩み方

- 4.1 教区フェーズで想定されることのまとめ
- 4.2 本シノドスのプロセスにおける司教の役割
- 4.3 本シノドスのプロセスにおける司祭と助祭の役割
- 4.4 行程表（教区フェーズの手順例）
- 4.5 本シノドスのプロセスの基本要素

5. 本シノドスのプロセスを整理するための資料

- 5.1 教区における本シノドスのプロセスのための方法論
- 5.2 本シノドスのプロセスの非公式的側面
- 5.3 意見聴取のための主な質問

謝辞

注：この「手引書」は、カトリック教会全体で使用されることを目的とする。したがって、「地方教会」とは、教区、東方典礼カトリック教会の教区（*eparchy*）、属人裁治区（*ordinariate*）、あるいは

それと同等の教会組織を意味する。同様に、この「手引書」が「司教協議会」という用語を使用している場合、これは、自治権を有する (*sui iuris*)、各教会のシノドス的な関連組織が該当する。

■付録

(A) 教区連絡担当者／チーム

- a. 教区連絡担当者／チームの役割と責任
- b. 教区連絡担当者の資質

(B) シノドス公聴会を運営するための推奨ガイド

(C) 教区シノドス前会議

- a. はじめに
- b. 目的
- c. 参加者
- d. 議題と形式
- e. オンラインまたは混合でのシノドス前会議（e-シノドス前会議）の実施可能性
- f. オンラインまたは混合での会議（e-シノドス前会議）における若者の役割

(D) 教区のまとめを準備する

- a. 教区のまとめで、どのような意見・反応が期待されるか：シノドス体験の成果と多様性の発信
- b. 教区のまとめを導く推奨質問
- c. 地方教会における教区のまとめという成果の履行

■本シノドスのプロセスを運営するための資料（訳注：未収録。おそらくウェブサイトにも）

- I. 用語集
- II. 本シノドスのプロセスを導くための意見聴取のための質問集
- III. さまざまなグループを本シノドスのプロセスに参加させる
- IV. 地域レベルで意見を聞くための指針とヒント
- V. 聖書資料
- VI. 典礼資料
- VII. 関連教会公文書の抜粋
- VIII. 本シノドスのプロセスにおけるコンセンサスの意味

■シノドスの FAQ（よくある質問）（訳注：未収録。おそらくウェブサイトにも）

1. はじめに

1.1 本「手引書」の目的

本「手引書 (*Vademecum*)」は、シノドスの旅の奉仕において、「準備文書 (*Preparatory Document*)」に付随するハンドブックとして作成されています。この二つの文書は、相互に補完し合うものであり、並行して読まれるべきものです。とくに、「手引書」は、教区司教から指名された「教区連絡担当者 (またはチーム)」が神の民を準備し、集めるための実践的な支援を提供します。それによって彼らは、地元の教会で自分たちの経験を語ることができるのです。この全世界に向けた信者全員への招きは、「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」をテーマとする、世界代表司教会議第16回通常総会の第1フェーズです。

教皇フランシスコは、今回のシノドスを通じて、地方レベルでの聞き取りと対話の機会を設けることで、教会がもつ深いシノド斯的性質を再発見するよう呼びかけています。教会のシノド斯的ルーツを再発見することは、3千年期の教会としてのあり方を神がどのように求めておられるかを謙虚に、ともに学ぶプロセスを含むものです。

この「手引書」は、各地方教会の取り組みを支援するためのガイドとして提供されるものであり、規則集ではありません。地方レベルでの聞き取りと対話のプロセスを準備する担当者は、自分たちの文化や状況、資源、制約に敏感になり、教区司教の指導のもと、シノドスのこの教区フェーズをどのように実施するかを識別することが求められています。わたしたちは、このガイドから有用なアイデアを取り入れることをお勧めしますが、同時に、皆さん自身の地域の状況を出発点とすることも勧めます。このシノドスのプロセスを機能させるために、小教区と教区の間で協力し合うための新しい創造的な道筋が見つかるかもしれません。このシノドスのプロセスは、地域の司牧活動と競合する、重荷と見なす必要はありません。むしろ、このプロセスは、各地域の教会がシノド斯的に、司牧的に回心することを促進し、宣教がより実り多いものになるためのチャンスです。

多くの地域で、小教区、運動体、教区レベルで、信者たちが取り組むプロセスがすでに確立しています。ラテンアメリカとカリブ地域の教会総会、オーストラリアの評議会総会、ドイツとアイルランドでのシノドスの旅など、地方教会が独自にシノド斯的な対話をすでに始めている国がいくつもあることを知っています。また、世界中で行われている多くの教区シノドスもあり、現在進行中のものもいくつかあります。これらの地域や教区は、すでに進行中のシノドスのプロセスを、教会全体で行われている現在のシノドスのフェーズに合わせて創造的に統合することが求められます。他の地域にとっては、このシノドスのプロセスという経験は新しく、未知の領域です。わたしたちが意図しているのは、この「手引書」を通じて提供される資料が、わたしたちがともに旅をする道すがら、適応できる適切で実りある実践方法を提案することによって、すべての人のために役立つツールを提供することです。このハンドブックに加えて、「手引書」には、a) オンラインの典礼、聖書、祈りの資料、b) より詳細な方法論の示唆とツール、c) 最近のシノドスの実践例、d) 本シノドスのプロセスのための用語集、が含まれています。

この聞き取りのプロセスは、分かち合い、聞く上でのオープンさを支える霊的環境で行われることがとくに重要です。そのため、シノドスのプロセスの地元での体験は、聖書の黙想、典礼、祈りに根ざしたものにしよう勧めます。このようにして、互いに耳を傾け合うわたしたちの旅は、聖霊の声を識別する真の体験となりえるのです。本物の識別は、深い内省の時間と、相互信頼、共通の信仰、共有された目的といった精神があれば可能となります。

「準備文書」は、このシノドスが開催されている背景を思い起こさせます。いくつか例を挙げると、パンデミック、地域紛争や国際紛争、気候変動による影響の増大、移住者、さまざまな形態の不正義、人種差別、暴力、迫害、人類全体に渡る不平等の拡大などです。教会においても、「あまりに多くの聖職者と奉獻生活者による性的虐待、パワーハラスメント、モラルハラスメントのために」²、未成年者や弱い立場の人々が経験した苦しみ为背景にあります。このように、わたしたちは教会と世界における生活の中で重要な瞬間にいることが理解できます。新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、既存の不平等を爆発的に増大させました。同時に、この世界的な危機は、わたしたちが皆、同じ船に乗っており、「一人の悪がすべての人を傷つける」（教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』32）という感覚を再び立ち上がらせたのです。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの状況は確かに、本シノドスのプロセスの展開に影響を与えるでしょう。この世界的なパンデミックは、物流に関する現実の課題を生じさせていますが、同時に、多くの地方教会が今後の歩みについてさまざまな疑問に直面している中、人類の歴史上の重要な時期に教会の再活性化を促進する機会を提供しています。

このような状況の中で、シノダリティは、聖霊の働きによって教会が刷新され、神がその民に語られることにともに耳を傾ける道を示しています。しかし、こうしてともに旅することにより、わたしたちは神の民として互いにより深く結びつけられるだけでなく、仲間であるキリスト教諸派や他の信仰伝統とともに、人類家族全体を包み込む預言的なあかしとして自分の使命を追い求めるために派遣されます。

1.2 シノダリティとは何か：本シノドスの背景

教皇フランシスコは、このシノドスを招集することによって、教会全体がその生活と宣教にとって決定的な主題について考察するよう招いています。「まさにシノダリティの歩みとは、神が3千年期の教会に期待しておられる歩みなのです」³。第二バチカン公会議が提唱した教会刷新の流れを受けて、こうして皆でともに旅をすることは、たまものであると同時に課題でもあります。教会の多様なメンバーは、これまでの旅路をともに振り返ることによって、聖霊に導かれながら、互いの経験や視点から学ぶことができるのです（「準備文書」1）。神のことばによって照らされ、祈りで結ばれたわたしたちは、神のみ旨を探し求め、神がわたしたちを招いている道筋—より深い交わり、十全なる参加、そして世界におけるわたしたちの宣教を成就するためのより広いオープンさに向けての—を探求するプロセスを識別できるでしょう。国際神学委員会は、シノダリティを次のように表現しています。

² 教皇フランシスコ「教皇から神の民にあてた手紙（2018年8月20日）」。

³ 教皇フランシスコ「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説（2015年10月17日）」。

「シノドス」とは、教会の聖伝の中で古くから使われてきた由緒あることばで、その意味は黙示録のもっとも深い主題に基づいています。……それは、神の民がともに歩む道を示しています。同様にそれは、ご自分を「道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ 14・6）と示された主イエスを参照し、さらにイエスに従うキリスト者がもともと「この道に従う者」と呼ばれていた事実を参照しています（使徒言行録 9・2、19・9、23、22・4、24・14、22 参照）。

何よりもまず、シノダリティは、教会の生活と宣教を特徴づける特定の「生活様式」を示すものであり、福音をのべ伝えるため、聖霊の力のうちに主イエスによって呼び集められ、ともに旅をし、集いに集まる神の民としての教会の性質を表現するものです。シノダリティとは、教会の普段の生き方、働き方の中で表現されるべきものです。

この意味で、シノダリティは、神の民全体が、聖霊と神のみことばに耳を傾けながらともに歩みを進めていくことを可能にし、神の民は、キリストがわたしたちの間に築く交わりの中で、教会の宣教に参加するようになります。最終的には、このともに歩む道こそが、神の巡礼者・宣教者としての教会の性質を表し、実践するもっとも効果的な方法なのです（「準備文書」1）。

神の民全体は、洗礼によって共通の尊厳と召命を共有しています。わたしたちは皆、洗礼を受けたことにより、教会の生活に能動的に参加するように招かれています。小教区、キリスト者の小共同体、信徒運動体、修道会、その他の形態の交わりにおいて、女性も男性も、若者も高齢者も、わたしたちは皆、聖霊の促しを聞くため、互いに耳を傾けるように招かれています。聖霊は、わたしたち人間の努力を導くためにやってきて、教会にいのちと活力を吹き込み、世界におけるわたしたちの使命のためにわたしたちをより深い交わりへと導いています。教会がこのシノドスの旅を始めるにあたり、わたしたちは、神が呼びかける教会のあるべき姿となる道において、真の聞き取りと識別の体験に身を置くよう努めなければなりません。

1.3 本シノドスの目的は何か：シノドスのプロセスの目的

教会は、シノダリティがその本質の不可欠な部分であることを認識しています。シノド斯的教会という状態は、公会議、世界代表司教会議、教区シノドス、教区や小教区の評議会の中で表現されます。すでに教会中で、「シノダリティ」の形態を経験する方法は数多く存在します。しかし、シノド斯的教会であるということは、これら既存の組織に限定されるものではありません。実際、シノダリティは、イベントやスローガンというよりも、教会が世界でその使命を果たすための生活様式やあり方なのです。教会の宣教には、一人ひとりが自分の重要な役割を果たし、互いに結びつきながら、神の民全体がともに旅をすることが必要です。シノド斯的教会は、そのメンバー一人ひとりの参加を通して、共通の使命を追求するために、交わりの中で前進します。今回のシノドスのプロセスの目的は、一時的、ないし一回限りのシノダリティの経験を提供することではなく、むしろ神の民全体が、長期的によりシノドス的な教会になるための道をどう前進していけばいいか、ともに識別する機会を提供することにあります。

第二バチカン公会議の成果の一つは、世界代表司教会議（シノドス）の設立です。これまで世界代表司教会議は、教皇の権威のもと、その権威をもって、司教たちの集まりとして実施されてきました

が、シノダリティは神の民全体の道であると、教会はますます認識するようになってきています。それゆえ、シノドスのプロセスは、もはや司教の集まりだけではなく、すべての信者のための旅であり、そこでは各地方教会が不可欠な役割を担っています。第二バチカン公会議は、洗礼を受けたすべての人々、つまり、聖職者と信徒の両方が、教会の救いの使命に能動的に参加するように招かれているという感覚を再活性化しました（『教会憲章』32-33）。信者たちは、洗礼と堅信において聖霊を受け、キリストのからだの一員として、教会の刷新と建設のために多様なたまものとカリスマを与えられています。したがって、教皇と司教の教導権は、神の民の生きた声である「信仰の感覚（*sensus fidelium*）」との対話のうちにあります（国際神学委員会『教会生活における「信仰の感覚」』74 参照）。シノダリティの道は、神の民の生きた声に司牧上の決定を置きながら、神のみ旨をできる限り近くから反映したその決定を行うことを目指しています（同『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』68）。指摘されていることですが、信徒、聖職者、修道者の神学者と協力することは、生きた経験に基づいた信仰の現実を表現する神の民の声を明確に述べる上で、有効な助けとなりうるのです。

近年のシノドスでは、新たな福音化、家庭、若者、アマゾンといった主題が考察されてきましたが、今回のシノドスでは、シノダリティそのものをテーマとします。

わたしたちが取り組んでいる現在のシノドスのプロセスは、基本的な質問によって導かれます。教会が福音をのべ伝えることができるように、今日、この「ともに旅をする」ことが、さまざまなレベル（地方レベルから世界レベルまで）でどのように行われているのでしょうか。また、シノドスの教会として成長するために、どういったステップを踏むように霊はわたしたちを招いているのでしょうか（「準備文書」2）。

このような観点から、今回のシノドスの目的は、神の民全体として、聖霊が教会に語っていることに耳を傾けることにあります。そのためには、聖書の中の神のみことばと教会の生きた聖伝とともに耳を傾け、そしてさらに、互いに、とくに周縁部にいる人々に耳を傾け、時のしるしを識別することが必要です。実際、シノドスのプロセス全体は、識別、参加、共同責任の生きた経験を育むことを目的としており、そこでは、世界における教会の使命のために、多様なたまものが集められています。

この意味で、このシノドスの目的は、さらに多くの文書を作成することではないことは明らかです。むしろ、わたしたちが招かれている教会についての夢を人々に抱かせ、希望を花開かせ、信頼を刺激し、傷口をふさぎ、新しく深い関係を紡ぎ、互いに学び合い、橋を架け、共通の使命のために精神を照らし、心を温め、手に力を取り戻すことを目的としています（「準備文書」32）。このように、今回のシノドスのプロセスの目的は、開始して停止する一連の作業であるだけでなく、むしろ、神が第3の千年期に教会に生き抜くよう呼びかけている交わりと宣教に向かって、真の意味で成長する旅なのです。

こうしてともに旅をすることで、現在の時のしるしの中で、教会に対する神の呼びかけを生き抜くために、わたしたちのメンタリティと教会組織を刷新する必要があります。神の民全体に耳を傾けることは、教会が神のみ旨にできるだけ一致した司牧上の決定を下すのに役立つでしょう（『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』68）。教会によるこのシノドスの道を方向づける究極的な視点は、神と

人類との対話に奉仕し（第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』2）、神の国をともに旅することです（『教会憲章』9、教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』20 参照）。結局、今回のシノドスのプロセスは、天のみ国の到来に、より実りある形で奉仕する教会を目指しているのです。

1.4 本シノドスのテーマ：ともに歩む教会のため：交わり、参加、そして宣教

2015 年 10 月に開催された「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典」で、教皇フランシスコは、「わたしたちが生きている世界、わたしたちがその矛盾の中にあっても愛し、奉仕するよう呼ばれているこの世界において、教会はその使命のすべての分野における協力を強化していくよう、強く求められています」と宣言しました。この教会の使命における協力の呼びかけは、神の民全体に向けられています。教皇フランシスコは、癒しに向けた教会の取り組みに貢献するため、「教皇から神の民にあてた手紙（2018 年 8 月 20 日）」を発表した際、このことを明確にしました。「一人ひとりの信者が、教会と社会の変革に参加するという自覚をもつ必要があります。変革はわたしたちにとって必要不可欠です。その変革を実現させるためには、個人と共同体が回心し、主と同じ視点で物事を見られるようになる必要があります」。2021 年 4 月、教皇フランシスコは、神の民全体のシノドスの旅を呼びかけ、2021 年 10 月に各地方教会で開始し、そして 2023 年 10 月に世界代表司教会議総会で頂点を迎えることとなっています。

本シノドスのプロセスのためのキーワード

今回のシノドスのテーマは「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」です。このテーマの三つの次元は、「交わり」「参加」「宣教」です。この三つの次元は相互に深く関連しています。これらは、シノドス的教会の重要な柱であり、これらの間には上下関係はありません。むしろ、それぞれが他の二つの要素を豊かにし、方向づけます。この三つの間にはダイナミズムあふれる関係性があり、これら三つが一つにまとめられていなければなりません。

→ **交わり**。神は恵み深いみ旨によって、その民に授けられた契約を通して、わたしたちを一つの信仰をもつ多様な民族として集められます。わたしたちが共有する交わりは、三位一体の愛と一致に、そのもっとも深いルーツをもっています。キリストは、わたしたちをおん父と和解させ、聖霊のうちにわたしたちを互いに結びつけてくださいます。わたしたちはともに神のみことばに耳を傾け、教会の生きた聖伝を通して触発され、わたしたちが共有する「信仰の感覚」に基礎を置いています。わたしたちは皆、その民に対する神の呼びかけを識別し、それを生き抜く役割を担っています。

→ **参加**。神の民に属するすべての人々（信徒、奉獻生活者、聖職者）が、敬意をもって深く互いに耳を傾け合うことを実践するように、という呼びかけです。こうして耳を傾けることで、わたしたちがともに聖霊に耳を傾ける場が生まれ、3 千年期の教会に対するわたしたちの志が導かれるのです。参加は、すべての信者がその資格を有し、各人が聖霊から受けたたまものによって互いに仕え合うよう招かれているという事実に基づいています。シノドス的教会では、共同体全体が、そのメンバーの自由で豊かな多様性の中で、「祈り、耳を傾け、分析し、対話し、識別し」、神のみ旨にできる限り一致するような「司牧的決定を行う」ための助言を提供するよう、ともに招かれています（『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』67-68）。周縁部にいる人や排除されていると感じている人たちを確実に包み込むために、真の努力をしなければなりません。

→ **宣教**。教会は福音化のために存在しています。わたしたちは決して自分自身を中心に置くことはできません。わたしたちの使命は、全人類家族のただ中で神の愛をあかしすることです。このシノドスのプロセスには、深く宣教的な側面があります。それは、とくにわたしたちの世界で、霊的、社会的、経済的、政治的、地理的、実存的に周辺部に住む人々とともに、教会が福音をよりよくあかすことができるようになるためです。このように、シノダリティは、教会が、神の国の到来に奉仕するパン種として、世界において福音化の使命をより実りあるものにするための道なのです。

1.5 地方レベルでの経験

このシノドスのプロセスの第1フェーズは、各地方教会における聞き取りのフェーズです。2021年10月9日（土）のローマでの開幕式典に続き、シノドスの教区フェーズは2021年10月17日（日）に開始されます。シノドスの旅の最初のフェーズを支援するために、シノドス事務局の事務局長であるマリオ・グレック枢機卿は、2021年5月に各司教に手紙を送り、地方教会での聞き取りフェーズを導く連絡担当者またはチームを任命するように呼びかけました。この担当者またはチームは、教区と小教区との間、および教区と司教協議会との間の連絡係でもあります。各地方教会は、2022年4月の締め切り前に意見のまとめが完成できるよう、司教協議会への回答を提供することが求められます。これにより、各国司教協議会と東方典礼のカトリック教会のシノドスは、今度はシノドス事務局にまとめを提出することができるのです。この資料は、二つの作業文書（「提題解説（*Instrumentum Laboris*）」として知られています）を書くための基礎としてまとめられます。最終的に、2023年10月にローマにおいて、世界代表司教会議総会が開催されます。

「準備文書」31項に記載されている通りです。

シノドス的な旅の第1フェーズの目的は、地域の特定の現実に応じて、もっとも適切な方法で、すべての異なるレベルの（地方）教会の司牧者と信者とを巻き込んで、さまざまな表現や局面で生きられたシノダリティの経験という宝を集めるために、幅広い意見聴取のプロセスを促進することです。司教によって準備される意見聴取は、「奉献生活者の男女が提供できる貴重な貢献を逃すことなく、個人的にも団体としても、各教会の司祭、助祭、信徒に」（教皇フランシスコ使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ（2018年9月15日）』7）向けられています。部分教会の参加諸団体の貢献がとくに求められており、中でも「司祭評議会」と「司牧評議会」の貢献が求められており、これらの評議会から「シノドス的な教会を（真に）形成し始めることができるのです」⁴。また、「準備文書」（とこの「手引書」）が送付される他の教会組織からの貢献や、自らの貢献を直接送りたいと考える人たちからの貢献も、同様に貴重なものとなるでしょう。最後に、（地方）教会の中で何らかの役割や責任を担っている人たちの声だけでなく、貧しく排除された人たちの声も、その場を見つけることが基本的に重要になります。

修道会、信徒運動体、信者の諸団体、その他教会グループは、各地方教会の中でのシノドスのプロセスに参加することが奨励されています。しかし、『エピスコパリス・コムニオ』（第6条「神の民

⁴ 「50周年記念式典演説」。

からの意見聴取」について）に記載されているように、彼らや、地域レベルで参加する機会をもたないあらゆる団体や個人が、シノドス事務局に直接提出することもまた可能です。

(1) 神の民からの意見聴取は、各部分教会において、東方典礼カトリック教会のシノドス (*the Synods of Bishops of the Patriarchal Churches and the Major Archbishoprics*)、自治権を有する評議会や総会 (*the Councils of Hierarchs and the Assemblies of Hierarchs of the Churches sui iuris*)、および各国司教協議会を通じて行われる。各部分教会において、司教は、適切と思われる他の方法を排除することなく、法規で規定された参加する諸団体を通じて、神の民からの意見聴取を行う。(2) 奉獻生活者の会、および使徒的生活者の会の、連盟、連合、男女協議会は、総長たちから意見聴取し、その総長たちは今度は自らの評議会や、問題となっている会の他のメンバーから意見聴取することができる。(3) 同様に、聖座によって認められた信者団体は、自分たちの会員に意見聴取を行う。(4) ローマ教皇庁の諸部署は、それぞれの専門分野を考慮して、各自が貢献できるものを提供する。(5) シノドス事務局は、他の形による神の民からの意見聴取を認証することができる。

意見聴取の各フェーズは、地域の状況に合わせて行われます。インターネット接続に制限がある遠隔地の共同体の人々は、都市部の人々とは異なる関わり方になるでしょう。また、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに現在見舞われている地域では、高い回復率の地域とは異なる対話や聞き取りの機会を設けることになるでしょう。地域の状況がどのようなものであっても、教区連絡担当者は可能な限り多くの人々、とくに排除されたり忘れられたりしがちな周縁の人々を巻き込むように手を差し伸べ、最大限の包摂性と参加に焦点を当てることが勧められます。可能な限り幅広い参加を促すことにより、教区、司教協議会、そして教会全体レベルで策定されるまとめの内容が、神の民の真の現実と生きた経験を確実にとらえられるようになります。このような神の民の関与こそが基礎であり、多くの人にとってシノダリティの経験を初めて味わうことになるので、各地での聞き取り活動が、このシノドスの道を刺激する、交わり、参加、宣教の原理に導かれることは不可欠です。地方レベルでのシノドスのプロセス展開には、次の点も含まれなければなりません。

- 傾聴を通じての識別。聖霊の導きのための空間を確保するために。
- 参加可能性。場所、言語、教育、社会経済的地位、能力／障害、物的資源を問わず、できるだけ多くの人が参加できるように。
- 文化的目覚め。地域社会での多様性を称賛し、受容するため。
- 包摂性。排除され、疎外されたと感じている人々を、あらゆる努力をして受容するため。
- パートナーシップ。共同責任を負う教会のモデルに基づき。
- 尊重。参加者一人ひとりの権利、尊厳、意見を。
- 正確なまとめ。少数派の回答者だけが表明した意見を含め、すべての回答者の批判と評価の視点の範囲を正しく捉えて。
- 透明性。招待、参加、包摂、意見集約のプロセスが明瞭であり、十分にコミュニケーションがとれることを保証しながら。
- 公正性。聞き取りプロセスへの参加において各人が平等に扱われ、すべての声が正しく聞き取られることを保証しながら。

教区連絡担当者は、それぞれの地域の教会の生きた経験の豊かさを引き出すことが勧められます。教区フェーズでは、このシノドスのプロセスの諸原則を念頭に置き、会話がある程度構成する必要があることを覚えておくと、それをまとめて、作業文書（「討議要綱」）の作成に効果的に反映させることができます。わたしたちは、霊が神の民を通してどのように語られるかに注意深くあることを目指しています。

2. シノドスのプロセスの原則

2.1 誰が参加できるのか

福音書を通して、イエスはすべての人に手を差し伸べていることがわかります。イエスは人々を個人的に救うだけではなく、群れ全体のただ一人の羊飼いとして、集めた人々を救ってくださるのです（ヨハネ 10・16 参照）。イエスの奉仕職は、神の救いの計画から誰も除外されないことを、わたしたちに示しています。

福音化の働きと救いのメッセージは、イエスが会衆に対し、可能な限りにつねに開かれていたことなしには理解できません。福音書では、彼らを「群衆」と呼んでいます。群衆とは、イエスの道に従うすべての人々と、イエスが自分に従うよう呼びかけたすべての人々で構成されます。第二バチカン公会議は、「すべての人が、神の新しい民に加わるように招かれている」（『教会憲章』13）ことを強調しています。神は、神が集められた民全体の中で真に働いておられます。だからこそ、「聖なるかたから油を注がれた信者の総体は、信仰において誤ることができない。この特性は、司教をはじめとしてすべての信徒を含む信者の総体が信仰と道徳のことがらについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通して現れる」（同、12）のです。さらに公会議は、このような識別は、聖霊によって力づけられ、あらゆる諸民族の間の対話を通して、教会の教えに忠実に、時のしるしを読みながら進められると指摘しています。

こうした観点から、教区フェーズの目的は、神の民から意見聴取することであり、今回のシノドスのプロセスは、洗礼を受けたすべての人々に耳を傾けることを通して実現されるのです。今回のシノドスを招集することによって教皇フランシスコは、教区レベルで始まるシノドスのプロセスに、すべての洗礼を受けた人が参加するよう招いています。各教区は、このシノドスの体験の主な対象がすべての洗礼を受けた人々であることを心に留めておくよう求められています。女性、障害者、難民、移住者、高齢者、貧困にあえぐ人々、信仰をほとんど、あるいはまったく実践していないカトリック信者など、排除されてしまう恐れのある人々を漏らさぬよう、特別な配慮が必要です。また、子どもや若者を参加させるために、創造性に満ちた手段を見つけることも必要です。

洗礼を受けたすべての人々は、ともに神の民の生きた声である「信仰の感覚」の主体です。同時に、識別の行為に十全に加わるためには、洗礼を受けた人が、信仰の実践から離れた人、他の信仰の伝統をもつ人、無宗教の人など、それぞれの地域の状況の中で他の人々の声を聞くことが重要です。それは、公会議が宣言しているように「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々と

すべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない」(『現代世界憲章』1)からです。

このため、すべての洗礼を受けた人々が今回のシノドスのプロセスに参加するよう特別に招かれています。何が善であり真理であるかを探求するシノドスの旅において、その人が教会を助けたいと思う限り、どの宗教に属していようと、自分の視点と経験を分かち合うことから誰も除外されるべきではありません。これはとくに、もっとも弱い立場にある人や疎外されている人に当てはまります。

2.2 真にシノドス的なプロセス：傾聴、識別、参加

シノドスのプロセスは、何よりもまず、「霊的な」プロセスです。機械的にデータを収集したり、一連の会議や討論を行うことはありません。シノドスにおける傾聴は「識別」を目的としています。個人として、共同体としての識別の技能を学び、実践することが求められます。神がわたしたち全員に何を語っておられるかを識別するため、わたしたちは互いに、自分の信仰伝統に、そして時のしるしに耳を傾けます。教皇フランシスコは、この耳を傾けるプロセスの、相互関連する二つの目標を特徴を示しています。「神に耳を傾けること。そうすれば神とともにその神の民の叫びを聞くことができます。神がそれと一致することを望んでおられる神のみ旨が自分のものとなるほどまでに、その民に耳を傾けるのです」⁵。

この種の識別は、単なる一回限りの行為ではなく、究極的には、キリストに立脚し、聖霊の導きに従い、より偉大な神の栄光のために生きる生き方なのです。共同識別は、今日の教会の宣教のために活躍し、回復力のある共同体を建設するのに役立ちます。識別は神からの恵みですが、そのためには単純な方法、すなわち、祈り、内省、内的気質へ注意を払うこと、真の、意義ある、受容するような仕方で互いに耳を傾け、話し合うことによって、人間の側が関与する必要があります。

教会は、霊的な識別のため、いくつかの鍵を提供しています。霊的な意味において、識別は、自分が決して行きたくない場所に導くものに誘惑されることなく、心の欲求が自分をどの方向に導くのかを解釈する技能です。識別には内省が伴い、心と頭の両方を用いて、具体的な生活の中で、神のみ旨を探し求め、見いだすために決断するものです。

傾聴がこのシノドスのプロセスの方法で、識別が目的であるならば、参加することがその道となります。参加を促進するためには、自分の殻から抜け出し、自分とは異なる意見をもつ人を巻き込む必要があります。自分と同じ意見の人に耳を傾けても何も実を結びません。対話とは、多様な意見が交わり合うことです。実際、神は、わたしたちが簡単に排除し、脇に追いやり、無視しがちな人々の声を通して語られることが多いのです。わたしたちは、重要でないと思われがちな人、新しい視点を検討させて自分の考え方を覚えてくれるような人の声に耳を傾けるよう、とくに努力すべきです。

⁵ 「50周年記念式典演説」。

2.3 シノドスのプロセスへの参加態度

教皇フランシスコはさまざまな機会に、シノダリティの実践が具体的にどのようなものであるか（教皇フランシスコ「世界代表司教会議第15回通常総会、開会あいさつ（2018年10月3日）」参照）についてのビジョンを語っています。わたしたちがシノドスのプロセスに参加する際、真の意味での傾聴と対話を可能にする具体的な姿勢は以下のようなものです。

- **シノドスであるためには、分かち合いの時間が必要です。**わたしたちは、「自由」「真理」「いつくしみ」を一体化するために、本物の勇気をもって包み隠さず（パレーシア）話すように招かれています。誰もが対話を通じて理解を深めることができます。
- **耳を傾ける謙虚さをもって、話す勇気に答えなければなりません。**誰もが話す権利をもっているのと同様に、聞いてもらう権利をもっています。シノドスでの対話は、話すときも聞くとともに勇気次第です。他者を説得するために議論をすることではありません。むしろ他者が語ることを、聖霊がすべての人の善のために語る一つの方法として受容することです（一コリント12・7）。
- **対話はわたしたちを新しいものへと導きます。**わたしたちは、他者から聞いたことに基づいて、自分の意見を喜んで変えるようでなければなりません。
- **回心と変化への寛容さ。**わたしたちが着手するよう聖霊が促していることに抵抗を感じることがあります。過去に行われた方法だけに基づいて決定を下すような、自己満足で安直な態度を捨てるよう求められています。
- **シノドスは、識別する、教会的实践です。**識別は、神が世界の中で働いておられるという確信に基づいており、わたしたちは霊が示唆するものに耳を傾けるよう招かれています。
- **わたしたちは、耳を傾け歩む教会のしるしです。**教会は、耳を傾けることによって、人々の叫びに耳を傾ける神ご自身の模範に従います。シノドスのプロセスは、既成の答えや事前に決められた判断に頼ることなく、自分自身を開放して、真摯に耳を傾ける機会を与えてくれます。
- **先入観と固定概念を捨てましょう。**わたしたちは、自分の弱さや罪深さによって重荷を背負うことがあります。耳を傾けるための第一歩は、わたしたちを無知と分断へと向かう誤った道へ導く先入観と固定概念から、精神と心を解放することです。
- **聖職者主義の弊害を克服する。**教会はキリストのからだであり、それぞれのメンバーが固有の役割をもったさまざまなカリスマで満たされています。わたしたちは皆、お互いに依存し合っており、聖なる神の民の中で等しい尊厳を有しています。キリストの似姿のうち、真の力は仕えることです。シノダリティは、信徒が自由にかつ正直に自分の意見を表明することを求めるのと同様に、司牧者に対しても、彼らが牧するようゆだねられた群れに注意深く耳を傾けることを求めています。愛をもち、交わりの霊と共通の使命のうちに、すべての人が互いに耳を傾け合います。このようにして、聖霊の力は、神の民全体の中で、それを通して、さまざまな形で表現されるのです。
- **「自己充足」というウイルスを治療する。**わたしたちは皆、同じ船に乗っています。ともにキリストのからだを形づくっています。自己充足という幻想を捨て、互いに学び合い、ともに旅をし、互いに仕えることができるのです。わたしたちは、年齢、性別、財産、能力、教育など、ときにわたしたちを隔てようとする壁を越えて、橋を架けることができるのです。
- **イデオロギーを克服して。**人々が具体的に生きている信仰生活の現実よりも、イデオロギーを重要視する危険性を避けなければなりません。

● **希望を生み出す。**正しく、真実であることを行うことは、注目を集めたり、話題になったりすることではなく、むしろ神に忠実であり、その神の民に仕えることを目的としています。わたしたちは、破滅の預言者ではなく、希望のかがり火となるよう招かれています。

● **シノドスは、夢を見て「未来と時を過ごす」時間です。**誰一人排除されることなく、福音の喜びに満ちた未来のビジョンを描けるよう、人々が刺激を受けるような現場でのプロセスを創造するよう勧められています。次のような資質が、参加者の助けとなるでしょう（教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている』参照）。

- **革新的な展望。**創造性のある種の大胆さをもって、新しいアプローチを開発すること。
- **包摂的であること。**しばしば忘れられ無視される人々をすべて受け入れ、自らの豊かな多様性を評価することのできる、参加型、共同責任型の教会。
- **オープンマインド。**イデオロギー的なレッテル貼りを避け、実を結んできたあらゆる方法論を活用しよう。
- **一人ひとりに耳を傾ける。**互いに学び合うことで、キリストの教会が本来あるべき素晴らしい多面的な現実を、わたしたちはよりよく反映させることができます。
- **「ともに旅をする」ことの理解。**3千年期のために、神が教会に求められている道を歩むこと。
- **共同責任を有する教会という概念を理解して。**教会全体の刷新と建設のために、キリストのからだの各メンバーの固有の役割と召命を評価し、関与させること。
- **エキュメニカルな対話、諸宗教間対話を通じて出向いていって。**人類家族全体の中で、ともに夢を見、ともに旅をすること。

2.4 落とし穴を避けるために

どんな旅でもそうですが、今回のシノダリティの期間中、わたしたちが成長するのを妨げるおそれのある落とし穴に注意する必要があります。以下は、このシノドスのプロセスの活力と実りを促進するために避けるべき、いくつかの落とし穴です。

1) **神に導かれるのではなく、自分自身を導きたいという誘惑。**シノダリティは、企業の戦略的実践ではありません。むしろ、それは聖霊に導かれる霊的プロセスです。わたしたちは、自分たちが神によって示された道を進む巡礼者であり、奉仕者であることを忘れてしまいがちです。組織化や調整のためのわたしたちの謙虚な努力は、わたしたちの道を導いてくださる神のためのものです。わたしたちは「陶工」である神の手の中にある粘土なのです（イザヤ 64・7）。

2) **自分自身や目先の関心事に集中したくなる誘惑。**このシノドスのプロセスは、心を開き、自分の周りを見渡し、他の視点から物事を見て、周縁部への宣教活動に出向いていく機会となります。そのためには、長期的に考える必要があります。また、自分の視野を教会全体に広げ、次のような質問をすることをも意味します。つまり、今、ここにある、教会に対する神のご計画は何ですか。どうすれば、地方レベルで神の夢を実現できるでしょうか。

3) **「問題」だけを見ようとする誘惑。**わたしたちの世界と教会が直面している課題、困難、苦難は数多くあります。しかしながら、問題ばかりに固執すると、わたしたちは圧倒され、落胆し、冷笑するだけになります。闇にばかり目を向けていると、光を見逃してしまいます。うまくいっ

ていないことに目を向けるのではなく、聖霊がいのちを生み出している場面を感謝し、どうすれば神がより十全に働くことができるかを考えましょう。

4) **組織だけに注目するという誘惑。**このシノドスのプロセスでは、より深い交わり、より完全な参加、より実りある宣教を育むために、教会のさまざまなレベルで、組織の刷新が当然求められます。同時に、シノダリティの経験は、何よりもまず組織に焦点を当てるのではなく、聖霊に励まされながら、ともに旅をして進むべき道を識別するという経験に焦点を当てるべきです。組織の回心と刷新は、キリストのからだのすべてのメンバーの継続的な回心と刷新によってのみ実現されます。

5) **目に見える範囲を超えて教会を見ようとしないう誘惑。**福音を生活の中で表現することで、信徒の男女は、自分が生活し、働いている世界の中でパン種の役割を果たしています。シノドス的なプロセスは、経済や科学、政治や文化、芸術やスポーツ、メディアや社会貢献活動の世界から来た人たちと対話する時間です。エコロジーや平和、生命の諸課題や移民について考える時間になるでしょう。世界におけるわたしたちの使命を果たすためには、大局を見なければなりません。それはまた、他のキリスト教諸派とのエキュメニカルな旅を深め、他の信仰伝統との理解を深める機会でもあります。

6) **本シノドスのプロセスがもつ目的の焦点を見失う誘惑。**シノドスの旅を進めていく中で、わたしたちの議論は多岐にわたるかもしれません。今回のシノドスのプロセスにおいて、わたしたちがともに前進するために、神がどうわたしたちを招いているのかを識別する、という目的を維持することに注意する必要があります。1回のシノドスのプロセスで、わたしたちの懸念や問題がすべて解決されるわけではありません。シノダリティとは、時間をかけて神の実りをともに受け入れるように開かれて、共同で責任を担う態度で前進していく姿勢やアプローチのことです。

7) **対立と分裂の誘惑。**「すべての人を一つにしてください」(ヨハネ 17・21)。これは、イエスがおん父に向かって、弟子たちの間の一致を求めた熱のこもった祈りです。聖霊は、わたしたちを神との交わり、互いの交わりをより深いところへと導いてくださいます。分裂の種は何の実も結びません。圧力をかけて自分の考えを「からだ」全体に押し付けようとしたり、異なる考えをもつ人をおとしめようとするのは無駄なことです。

8) **シノドスを一種の議会のように扱うという誘惑。**これはシノダリティを、統治のために一方が他方を倒さなければならないという「政治闘争」と混同するものです。他者を敵視したり、教会の一致と交わりを脅かす、分裂をもたらす対立を助長することは、シノダリティの精神に反するものです。

9) **すでに教会活動に参加している人の意見だけに耳を傾けるという誘惑。**このアプローチはやりやすいかもしれませんが、最終的には神の民のかなりの割合を無視することになります。

3. 本シノドスのプロセス

ともに歩む教会のため——交わり、参加、そして宣教

世界代表司教会議 第16回通常総会

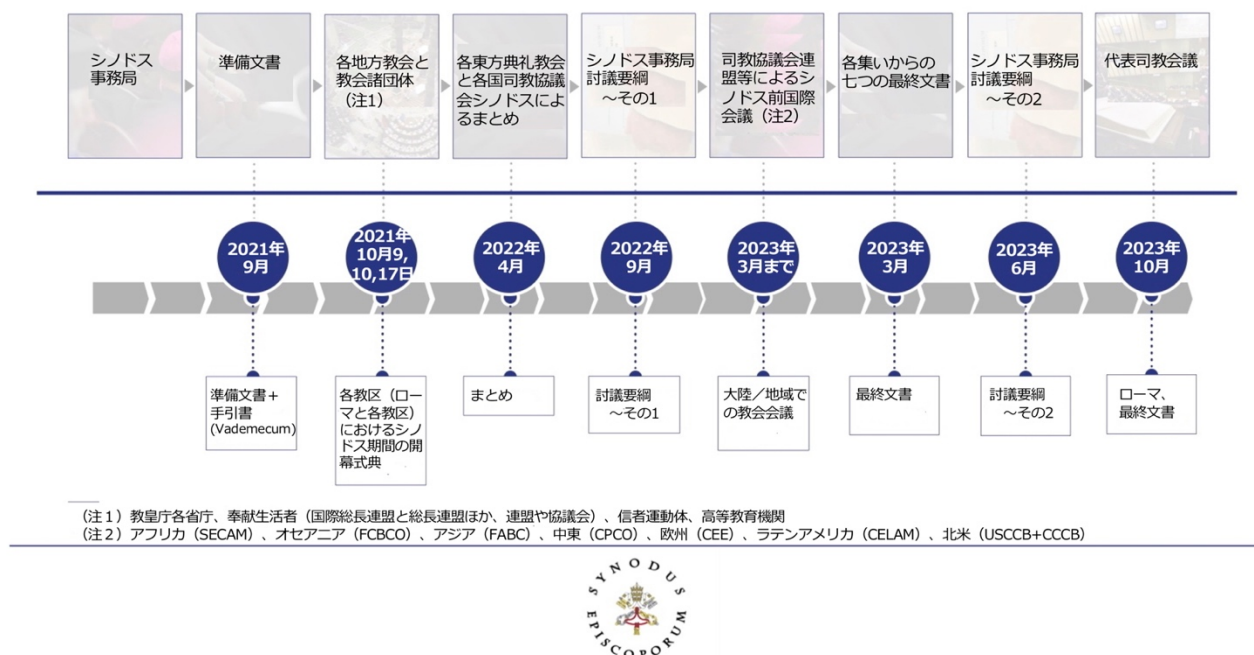


図1. この解説図は、今回のシノドスのプロセスの全体的な流れを示しています。シノドス事務局は、地方教会がシノドスの教区フェーズを遂行するためのツールとして、「準備文書」と「手引書」を発行します。この教区フェーズでの成果は、各地方教会でひとつのまとめに集約されます。その後、各地方教会から受け取ったまとめの内容に基づき、司教協議会や東方典礼カトリック教会のシノドスで一つのまとめが策定されます。他の教会諸団体も、この「手引書」と「質問票」（下記 5.3 参照）を受け取って意見聴取に参加し、独自のまとめを策定することができます。これらの団体には、ローマ教皇庁の諸部署、男女国際修道会連盟（USG と UISG）、その他の奉獻生活の連合や連盟、国際信徒運動体、大学、神学部などが含まれます。シノドス事務局は、各局司教協議会、東方典礼カトリック教会のシノドス、その他『エписコパーリス・コムニオ』で言及されている教会諸団体から受け取ったまとめに基づいて、「討議要綱（*Instrumentum Laboris*）～その1」を作成します。この「討議要綱～その1」は、その後、大陸レベルの会議で議論されます（下記 3.3 参照）。大陸レベルで作成された文書に基づいて、2023 年 10 月に開催されるシノドスの総会で使用するために、「討議要綱～その2」が作成されます（シノドス事務局）。

3.1 教区フェーズ

この聞き取りのフェーズの豊かさの多くは、小教区、信徒運動体、学校や大学、修道会、地域のキリスト教グループ、社会活動、エキュメニカルや諸宗教運動、その他のグループでの議論から生まれます。このプロセスは司教たちが開始するものなので、教区レベルでの参加は、教区司教の定期的な連絡手段を通じて調整されることになるでしょう。小教区司牧評議会をもつ小教区、教区司牧評議会をもつ教区は、周縁部やほとんど聞かれない声に手を届かせる努力をすることを条件に、これらの既存の「シノドス的な」組織を利用して、地方レベルで今回のシノドスのプロセスを組織し、促進し、活気を与えることができます。その目的は、教区や小教区を圧倒することではなく、むしろ、より深

い交わり、より充実した参加、より実りある宣教を促進する創造的な方法によって、今回のシノドスのプロセスを地方教会の生活に統合することにあります。

この聞き取りのフェーズでは、人々が集まり、刺激的な質問／イメージ／状況に対しともに答え、互いに耳を傾け合い、個人やグループでの意見、アイデア、反応、提案などを提供するように勧めます。ただし、事情によって（パンデミックによる規制や物理的な距離など）、対面での対話が困難な場合は、司会者が付いたオンライン討論の集まり、個人でのオンライン作業、チャット・グループ、電話、その他さまざまな SNS、また紙媒体やオンラインによるアンケートなどを利用することもできます。また、祈りの材料、聖書解説、聖歌、さらに芸術作品、詩なども、考察と対話を促すために使用することができます。

この教区フェーズは、小教区と教区がともにシノドスの旅に出会い、体験し、生きていく機会であり、その結果、それぞれの地域の状況にもっとも適したシノドス的な方法と道筋を発見したり、発展させたりすることができ、それが最終的には、シノドス的な道を歩む地方教会の新しい生活様式となるのです。

したがって、今回のシノドスは、2023 年 10 月にローマで開催されるシノドス総会を助ける回答を期待しているだけでなく、プロセスの過程の中で、また将来的に向けて、「シノドスになる」ことの実践と経験を促進し、発展させてほしいのです。「ラテンアメリカ司教協議会総会のための方法論的ガイド」(<https://asambleaecclesial.lat/wp-content/uploads/2021/05/METHODOLOGICAL-GUIDE.pdf>) や「オーストラリア評議会総会」(<https://plenarycouncil.catholic.org.au/>) とその「主要文書」(<https://plenarycouncil.catholic.org.au/keydocuments/>) など、すでにこの旅を始めている地方教会の優れた資料があります。わたしたちは、皆さんの地方教会での活動を助け、刺激するために、これらの資料を参照するよう勧めます。

3.2 各国司教協議会と東方典礼カトリック教会シノドスの役割

教区フェーズが、教区シノドス前会議と教区のまとめで終了したあと、各国司教協議会と東方典礼カトリック教会のシノドスは、各教区から受け取った情報と意見を集め、地方レベルでの参加者の貢献を適切に捉えるまとめを策定します。各国司教協議会と東方典礼カトリック教会のシノドスは、それぞれ自らのシノドス前会議を通して、このより広いまとめを識別し、整理するよう求められています。

これらのまとめは、そののち、シノドス事務局が発行する「討議要綱～その 1」のもととなります。

3.3 大陸フェーズ

この「討議要綱～その 1」は、七つの大陸会議、つまり、アフリカ（SECAM）、オセアニア（FCBCO）、アジア（FABC）、中東（CPCO）、ラテンアメリカ（CELAM）、欧州（CCEE）、北米（USCCB と CCCB）の「作業文書」となります。

この七つの国際会議では、七つの「最終文書」が作成され、それらは、2023 年 10 月に開催されるシノドス総会で使用される「討議要綱～その 2」の基礎となります。

3.4 シノドス総会

司教やオブザーバーらは、2023 年 10 月にローマで開催されるシノドス総会に、教皇フランシスコとともに集まり、地方レベルで始まった今回のシノドスのプロセスを基礎に、互いに話し、耳を傾けます。このシノドス総会の目的は、教区、司教協議会／東方典礼カトリック教会シノドス、大陸フェーズを見劣りさせることなく、むしろ、全教会を通して語られてきた聖霊の声を、普遍教会レベルで識別することにあります。

3.5 履行フェーズ

このシノドスは、教会の交わり、参加、宣教を生きる、新たな生活様式を促進することを目的としているので、シノダリティの道をともに前進するためには、履行していくフェーズが重要となります。この履行は、世界中のすべての地方教会に行き渡ることが目指されており、今回のシノドスのプロセスは、神の民全体をその出発点とし、また到達点としています（『エピスコパーリス・コムニオ』7）。教区司牧評議会、司祭評議会、小教区司牧評議会を含め、教区フェーズにかかわった教区連絡担当者や他の人々・組織は、この点において助けとなるでしょう。

希望していることは、今回のシノドスのプロセスの経験が、傾聴、識別、対話、意思決定のための新たな春をもたらし、神の民全体が、聖霊の導きのもと、互いに、そして人類家族全体とともに、よりよい旅をすることができるようになることです。

4. 教区における本シノドスの旅の歩み方

4.1 教区フェーズで想定されることのまとめ

今回のシノドスのプロセスのこの第 1 フェーズは、その後続くすべてのフェーズの基礎となります。教区フェーズは、単に質問票に答えるだけでなく、できるだけ多くの人々に、お互いに耳を傾け、聖霊に導かれてともに歩むという、真に「シノドス的な体験」を提供することを目的としています。

このともに歩む旅を照らし、それにいのちを与える神の霊は、イエスが使徒たちに託した使命の中で働いているのと同じ霊です。聖霊は、神のみことばを聞き、それを実践する、すべての時代の弟子たちを通して働かれます。キリストから遣わされた聖霊は、イエスの福音の継続性を確証するにとどまらず、つねに新しい神のみことばの深みを照らし、教会の旅を維持しその使命を活性化するために必要な決断に息吹を与えます（ヨハネ 14・25-26、15・26-27、16・12-15 参照）（「準備文書」16）。

「準備文書」は、シノドス的教会を建設しようとするわたしたちの旅を刺激するために、聖書からの二つの「イメージ」を概説しています。第 1 のイメージは、イエスの説教が始まって以来、福音化の旅に常に伴う「共同体の場面」から出てきたもので、群衆、使徒たち、主など、誰もが自分の居場

所を見つけることができます（同、17-21）。第2のイメージは、ペトロと初代教会の共同体の聖霊体験を指しています。そこでは信仰の分かち合いに不当な制限を加えることの危険性が理解されるのです。（同、22-24）。わたしたちは、このシノドスのプロセスにおける滋養とひらめきの源として、この二つのイメージを内省することを勧めます。

福音は、イエスがつねに、排除され、疎外され、無視された人々に手を差し伸べていることをあかししています。イエスの奉仕職に共通する特徴は、人々が大切にされたときに、信仰がつねに生まれるということです。彼らの願いが聞きいれられ、困難な状況で助けられ、その有用性が評価され、その尊厳が神のまなざしによって保証され、共同体の中で元気を取り戻すのです。ペトロがコルネリウスとの体験によって変えられたように、わたしたちもまた、神がわたしたちを招いていることによって自分自身が変わられるようにならなければなりません。今回のシノドスのプロセスを通じ、神は、わたしたちが互いに体験し合うことによって、共通の回心の道へと導いてくださいます。しばしば驚くような仕方で、神は他者を通してわたしたちに触れ、わたしたちを通して他者に触れるのです。

これを実現させるために、できるだけ多くの人々を有意義な形で巻き込むため、相当の努力が必要となります。このことは、今回のシノドスのプロセスの教区フェーズを導き、活性化させるために任命された教区連絡担当者の第1の責務です。人々の経験が正確に、かつ豊かに表現していない、表面的な、あるいは台本通りの情報は役に立ちませんし、経験の全範囲と多様性を表現しきれていない情報も同様です。

この意味で、教区フェーズは、可能な限り幅広い参加を得るため、もっとも効果的な方法を見つけることから始めるべきです。わたしたちは個人的に、周縁部、教会から離れた人々、信仰をほとんど、あるいは全く実践していない人々、貧困や疎外を経験している人々、難民、排除された人々、声なき人々などのところに向かい出なければなりません。

シノドス的経験の中心は、神のことばに触発され、お互いに耳を傾け合うことを通して、神に耳を傾けることです。わたしたちは、今日、この世界に語りかける聖霊の声をよりよく聞くために、お互いに耳を傾け合います。これは1回の集まりの中でも起こりえますが、人々が互いに知り合い、信頼し合って、より相互作用できる雰囲気の中で分かち合うことができるよう、数回の集まりを開くことを強く勧めます。そうすることで、人々はより自由に話すことができると感じ、それは、ともに旅をするという真にシノドス的な体験となるのです。互いに語り耳を傾けるという、より形式張った面に加え、集まりでは、堅苦しくない時間をもつことも重要です。巡礼、グループ活動、芸術表現、さらに休憩時間でさえ、互いに生活を分かち合う体験を通し、共同体意識を育むのに役立ちます。

これらの集まりがどのような形で行われるかは、皆さんの地域の状況によります。いくつかの小教区が一緒に集まることもできるでしょうし、医療関係やカトリック教育などの奉仕職、修道会、信徒運動体、エキキュメンカルなグループで集まることも考えられます。

この分かち合いと傾聴の経験を始め、促進するために、刺激となる質問が以下の質問票（5.3）に提案されています。すべての質問に答えることが目的ではなく、皆さんの地域の状況にもっとも当ては

まる質問を選んでください。また、他の質問をすることもできますし、そうすることを勧めます。一般的な勧めとして、「教義的」な発言よりも、個人的な逸話や実生活での経験と呼び起こすような種類の質問を重視してください。いくつかの例については、第5章を参照してください。

意見聴取の過程で寄せられた意見は、「まとめ」として集約すべきものです。以下の行程表(4.4)で説明されているように、この「手引書」(第5章)に概説されている質問に答えるために教区内で集まりがあるときは、いつもまとめを書くべきです。同時に、各教区、そして最終的には各国司教協議会のためにもまとめが書かれます。これらのまとめの目的は、どのレベルであっても、語られたすべてのことの全体的な要約を作成することや、学術的な演習を行うことではありません。むしろ、このまとめは、教区(教区内での意見聴取の場合)、そして最終的には司教協議会(教区が書いたまとめの場合)に送られることによって、今回のシノドスのプロセスの次の段階に貢献するものを選び、書くことにおける識別の行為なのです。この意味で、まとめは、共通の傾向や収束点を報告するだけでなく、心に響く点、独自の視点を刺激する点、新しい地平を開く点を強調します。まとめは、あまり聞いてもらっていない人々の声にとくに注意を払い、「反対意見書」と呼びうるものを入れておくべきです。意見は、肯定的な体験を強調するだけでなく、聞き取りがなされてきたことの現実を反映するために、厳しく、否定的な体験も明るみに出すべきです。参加者の態度、ともに識別にかかわることの喜びと課題といった、地域の集まりでの体験の何かが、意見の中で伝えられるべきです。

これらの地域の集まりから得られた意見は、次に教区レベルでの全体的なまとめのために集約されます。この聞き取りと識別の作業の最後に各教区が作成するまとめは、神の民全体の旅への具体的な貢献となります。またそれは、地方教会がシノダリティの道を歩む上で、次のステップを特定するための有益な文書となります。このシノドスのプロセスの次の段階を円滑に進めるためには、祈りと考察の成果を最大 10 ページ に要約することが重要です。教区のまとめに、その内容を補足したり、添えたりするために、他の文書を添付することができます。

各教区のまとめは、その後、各国司教協議会と東方典礼カトリック教会のシノドスに届けられます。次にこれらは、受け取った教区のまとめに基づいて、上述のような同じ識別の精神をもって、彼ら独自のまとめを起草します。各国司教協議会と東方典礼カトリック教会のシノドスは、その後、自分たちが作成したまとめをシノドス事務局に提出し、そこで、地方レベルで分かち合われ、経験されたことをもとに、作業文書である「討議要綱～その1」を作成します。

4.2 本シノドスのプロセスにおける司教の役割

シノダリティは、ペトロの後継者の首位権のもとにある司教団の司牧的權威と、各教区の司教が自分にゆだねられている教区での司牧的權威なしには存在しません。司教の奉仕職は、司牧者、教師、聖なる典礼の司祭であることです。司教の識別のカリスマは、司教が教会の信仰の真の保護者、解釈者、あかし人となるよう招いています。地方教会のうちに、またそれらから、唯一単一のカトリック教会が存在するのです(『教会憲章』23)。今回のシノドスのプロセスの十全性は、各地方教会の関与によってのみ真に存在することが可能であり、教区司教の人格的関与を必要とします。「この普遍性のゆえに、個々の部分は、自分に固有なたまものを他の部分と全教会に提供し、こうして全体と個々の部分とは、相互に交換し合うことにより、また一致における完成を目指して協力することによって成

長していく」(同、13) のです。地方教会の多様性とその背景や文化は、さまざまなたまものを全体にもたらし、キリストのからだ全体を豊かにします。これこそが、教会がシノダリティの道を歩むことを理解する鍵となります。

したがって、このシノドスのプロセスにおける教区司教の主な役割は、よりシノド的な教会へ向かう道のりにおいて、神の民全体のシノド的な経験を促進することです。教区司教は、その教区の教会において、神の民に耳を傾けるという重要な役割を担っています。聖霊の励ましのもと、司教は、教会全体が取り組んでいるシノダリティの道筋に沿って、自分の教区で神の民に耳を傾けるため、もっとも実りあるプロセスを識別することができます。この働きにおいて教区司教を支えるために、司教は教区連絡担当者、またはチームを任命するでしょう。彼らはともに祈りのうちに、識別することができます。司教は、このシノドスのプロセスの教区フェーズにおいて、積極的な役割を果たすことが望まれます。司教の関与は、神の民の多様性の中で、開かれた対話を促進するものでなければなりません。

司教は、準備するプロセスの中で役立つところであればどこでも、意見や参加を求めることができます。司教は、教区司牧評議会、司祭評議会、小教区、修道会、信徒運動体、さまざまな司牧奉仕職(学校や病院など)、教区の諸委員会など、教区内の各団体、組織、機構と連絡を取り、今回のシノドスのプロセスへの参加を促し、必要に応じて協力要請することが求められます。司教の権威のもと、教区連絡担当者は、小教区やその他の地域共同体の準備担当者と直接連絡を取り、意見聴取のプロセスの準備と調整を行うことができます。

同時に司教は、財政、物流、技術、および人的資源を含む、適切な資源が確保されるよう保証することができます。また司教は、多様なグループや個人の参加を奨励する役割を担っており、それによってこのシノドスのプロセスは真に協力的な取り組みとなり、信者の幅広い参加を得て、司祭、助祭、奉献生活の男女、そして信徒という、多様な神の民全員に手が届くのです。とくに、教区司牧評議会、司祭評議会、小教区司牧評議会といった、すでにシノダリティの実践を目指している教区組織は、この点に関して重要な支えとなります。

また、個人的な書簡や動画を作成し、その中で司教が教区内のすべての人に、傾聴、対話、意見聴取のプロセスに参加するように呼びかけ、奨励することもできます。このシノドスのプロセスの教区フェーズはミサによって、開幕、閉幕することが推奨され、その司式は司教が行うものです。

意見聴取のプロセスにおいて、司教の重要な役割は耳を傾けることです。傾聴のプロセスにおける教区司教の個人的なかかわり方はさまざまですが、司教は信者たちの声にかかわり、注意を払うことが勧められます。司教がもし望むなら、教区中の各地公聴会に参加するだけでなく、教区さまざまな代表者、とくに周縁部に追いやられている人々を招いて、小さな特別グループの集まりを開催することができます。加えて、司教はまた、意見聴取で集められた意見を検討し、自分にゆだねられた人々を通して聖霊が何を語っているかを識別することで、耳を傾けることもできます。定期的に、司教は教区連絡担当者と会い、意見聴取の進捗状況を確認し、直面している課題に対処すべきです。とくに

スキャンダルが起きていたり、単に文化的恭順という状況があって、司教や聖職者の出席が、信者からの正直で自由な意見を阻害するといった、思わぬ影響が出ないように注意すべきです。

最後に、司教は、教区フェーズを締めくくるために、教区のシノドス前会議を招集し、教区連絡担当者と協力して準備します。この集まりは、ともに祈り、耳を傾け、内省し、神の霊が教区全体を招くシノドスの道を識別するために集まることを目的に、教区中から幅広い代表者を要請すべきです。そこで司教は、司教協議会に提出する前に、教区連絡担当者と協力して、教区のまとめを見直すことができます。教区のまとめは、教区司教について、肯定的にも否定的にも考察することを意図するものではないことに留意することが非常に重要です。むしろ、教区のまとめは、このシノドスのプロセスの教区フェーズで共有されたすべてのことを正直に報告するものであり、神の民の多様な見解と展望を表すものでなければなりません。

当然のことながら、この意見聴取のプロセスに着手することは、司牧の指導者たちに、興奮や喜びに始まり、不安、恐れ、疑念、さらに懐疑心に至るまで、さまざまな感情を呼び起こすでしょう。このような微妙な反応がシノドスの道のりの一部となるのはよくあることです。司教は、教区内で生じるさまざまな反応を理解しつつ、他方で、驚かせる、ワクワクさせるような仕方でよく働く聖霊にオープンでいるよう、人々を励ますことができます。自らの群れのよい牧者として、司教は神の民の前に出向き、そのただ中に立ち、誰も取り残されたり迷子になったりしないように後ろから付いていくよう招かれています。

4.3 本シノドスのプロセスにおける司祭と助祭の役割

司祭と助祭の奉仕職には、二つの重要な参照点があります。一方が、教区司教、他方では、自らの司牧にゆだねられた人々です。このように、現場の教会にいる聖職者は、司教と、彼らが奉仕する人々との間に、有益な接点を提供します。こうしたことから司祭と助祭は、司教と一体となって、信者に奉仕しながら、神の民のただ中でともに旅をする上で鍵となる役割を担っています。彼らは司教に代わって人々に意志を伝えることができ、また人々から司教へと意志を伝えることもできます。彼らは、キリストのからだを築くための交わりと一致の仲介者であり、信者たちがともに旅をするのを助け、教会の中でともに前進していくのです。聖職者も同様に、刷新の先駆者であり、自分の群れがもつ、進化する必要性に気を配り、聖霊がどのように新しい道を切り開いているかを指摘します。究極的に彼らは、シノダリティの純粋な「霊的」体験を促す祈りの人であり、それによって神の民は聖霊により注意を払い、神のみ旨とともに耳を傾けることができるのです。

この意味で、司祭と助祭は、神の民全体をシノダリティの道に導く上で、重要な役割を担っています。キリストの教会となるために、よりシノドス的な手段を促進し、実践に移すことに向けた彼らの努力は極めて重要です。司祭と助祭は、自分が奉仕する小教区、奉仕職、運動体において、教会のシノドス的な性質とシノダリティの意味について認識を高めることができます。司祭と助祭はまた、現場の教会で今回のシノドスのプロセスの教区フェーズの展開を支え、励まし、促進し、可能にすることが求められています。これは、教区司牧評議会、司祭評議会、小教区司牧評議会といった、教区中にすでに設置されている参加型の組織を通して行われます。とくに司祭評議会と司牧評議会といった、各地方教会における「シノドス的」機関の関与がとくに求められています（「準備文書」31）。教

会がシノダリティの道を歩む上で、これらの教区レベルの参加型機関は「基本的なものであることを証明することができ、ここからシノドス的な教会は現れ始めることが可能となる」（『エписコパリス・コムニオ』7）のです。

同時に、司祭と助祭は、今回のシノドスのプロセスのために任命された教区司教と教区連絡担当者の取り組みに関連して、信徒の間で真に「シノドス的な」体験を育む、新たな創造的方法を見つけることができます。シノドスのプロセスの教区フェーズで行われる意見聴取は教区司教によって調整され、「奉献生活の男女が提供できる貴重な貢献を見逃すことなく、個人でも団体でも、自分の（地方）教会の司祭、助祭、信徒に」（同）向けられているということは、注目に値します。

「準備文書」は、イエスの宣教において、次のように述べています。「使徒たちの選出は、権力と分離といった排他的地位の特権ではなく、祝福と友情といった包摂的な奉仕職の恵みです。復活した主の霊のたまもののおかげで、彼らはイエスに取って代わるのではなく、イエスの場を守るようになるのです。イエスの現存にフィルターをかけるのではなく、イエスに出会いやすくするのです」（「準備文書」19）。同様に、聖職者はみな、叙階によって与えられた聖なるたまものとカリスマをもって、このシノドスの経験が、祈りに基礎を置き、ミサによって養われ、神のみことばに耳を傾けることによって触発される、復活したキリストとの真の出会いとなることを保証するために、重要な役割を担っているのです。

4.4 行程表（教区フェーズの手順例）

各教区内で傾聴と対話のフェーズを実施するために必要な作業は、地域の要因によって異なりますが、一般的なアプローチでは以下のような段階を踏みます。

1. 教区連絡担当者を任命する

各教区は、教区連絡担当者としての役割を果たす1人または2人の個人を選ぶべきです。付録Aには、これらの連絡担当者の責任と望ましい資質の詳細が記載されています。理想的には、共同責任のモデルとして、2人の共同リーダーが任命されます。もし複数の教区連絡担当者がある場合は、少なくとも1人は女性、1人は男性を任命することが勧められます。これらは、無償、または有償の任務であり、すでに教区内で働いている人が引き受けることもできます。教区連絡担当者は、司祭、修道者、信徒でありえます。教区は、2023年10月までと、それ以降も、教区内のシノダリティの道に継続して奉仕する上で、教区連絡担当者の役割の可能性について検討することができます。

2. 教区シノドスチームを設置する

教区連絡担当者は、おそらく中核チームの協力を得て働く必要があるでしょう。中核チームは、関心を表明する人々の自由な動きを通じて、または教区司教の任命によって組成することができます。教区シノドスチームのメンバーは、小教区、運動体、教区の奉仕職、および修道会からの代表者で構成されるでしょう。このチームは、教区連絡担当者の諮問機関、また作業部隊として集めることができます。現在のシノドスの教区フェーズを超えて、教区シノドスチームは、教区司教と協力して、教区におけるシノダリティの道を将来にわたって推進し、履行し続けることができます。

3. 皆さんの教区のための道を識別する

「準備文書」と「手引書」は、今回のシノドスについての情報を提供し、意見聴取のプロセスを準備するためのガイドラインを示しています。これらの文書は、現場の教会や社会におけるいまの現実や課題に応じ、また教区内で同時進行しているか、または最近行われたシノドス的なプロセスに応じて、さまざまな状況の中で異なった仕方で適用されるべきものです。教区が焦点を当てるべき重要分野を識別するため、これらの文書をもとに祈りをもって考察することができます。

4. 参加型のプロセスを計画する

各教区は、さまざまな舞台を用いて、可能な限り幅広い参加を目指すべきです。ここには、小教区レベルの会議、小教区同士の集まり、学校単位のグループ、地域の集い、オンラインでの交流手段、特別な言語グループ、そして教会から遠ざかっている人々につながるための適切な手段などが含まれるでしょう。理想的には、多様なグループがお互いに耳を傾け合う機会があるといいでしょう。全体的な予算、物理的な施設、オンラインでの交流手段といった、意見聴取のプロセスに必要なリソースを特定し、利用可能な状態にしておかなければなりません。必要に応じて、教区間で連帯し、資金援助や人的資源の提供をすることもできます。

5. シノドス公聴会のためのグループ世話人を準備する

教区のシノドスチームは、教区全体でシノドス公聴会を実施するにあたり、世話人を介して作業することができます。たとえば、小教区内のシノドス公聴会は、その小教区の世話人が小教区のチームと協力して監督することができます。すべての世話人は、今回のシノドスのプロセスの精神、目的、態度について説明を受ける必要があります、この「手引書」と今回のシノドスのウェブサイトを含む関連資料を見られるようにしておくべきです。その後、世話人は、教区シノドスチームと連絡を取りながら、自分たちの特定のグループにもっとも適したプロセスを識別し、計画をたてることができます。

6. 教区シノドスチームと現場の世話人のための説明会を開催する

シノダリティに関する理解と経験のレベルは教区内でも異なると思われるので、シノダリティについての方向性とシノドス的なプロセスのための基本技能を身につけさせるために、研修会を提供することができます。そうした技能には、シノドス公聴会の実施が含まれ、こうした基礎養成自体が、今回のシノドスのプロセスの貴重な成果となるのです。付録Bは、典型的なシノドス公聴会がどのように行われるかの概要を示しています。もっとも重要なことは、注意深く耳を傾け、真の分かち合いをし、共同で霊的識別をすることを促進する適切な方法を採用することです。さらなる資料は、今回のシノドスのウェブサイトで入手できます。

7. すべての人に伝える

意識を高め、参加を促すために、今回のシノドスに関する幅広い広報活動を行い、シノドスの意義や目的、人々がどのように参加できるかを伝えることができます。広報資料のサンプルは、ウェブサイトに掲載されています。

8. シノドスの意見聴取プロセスを実施、監督、指導する

準備が整ったら、シノドスの意見聴取プロセスが始まります。この段階の中心は、教区全体で行われるシノドス公聴会です。教区フェーズを開幕するために、教区ミサを企画し、プロセス全体を導く聖霊を祈り求めることができます。教区フェーズを通じ、教区連絡担当者は教区内のシノドス公聴会のグループ世話人と定期的に連絡を取り、進捗状況を監督し、必要に応じて支援を提供し、アイデア、最優良事例、新規意見の交換を促進するべきです。聞き取った意見の提出日を定めるべきで、そのために、以下に説明する教区のまとめに関するガイドラインに従うことができます。

9. 教区シノドス前会議

教区での意見聴取のプロセスは、ミサを含む教区シノドス前会議で終えることが強く勧められます。ともに集まって、祈り、耳を傾け、内省し、神の霊が教区全体に呼びかけるシノドス的な道を識別するために、教区全体から幅広い代表者が参加するよう招かれるべきです。付録 C には、この集まりを準備するための示唆が提供されています。

10. 教区のまとめを作成し提出する

最後に、照合された教区内のすべての意見と、シノドス前会議の議事録に基づいて、教区のまとめが準備されます。付録 D には、概略が示唆されています。これは指定された日までに司教協議会に提出されるべきものです。いったん完成すると、まとめは教区内で一般の人々に伝えられるべきです。教区連絡担当者は、今回のシノドスのプロセスを通じて、少なくとも 2023 年 10 月のシノドス総会まで職務を続けるべきで、彼らの役割はそれ以降も継続することができます。現在のシノドスの連続する各フェーズにおいて、彼らは司教協議会と大陸での集まりの連絡窓口となり、教区がこのシノドスのプロセスに関与し続けるのを助けることができます。また、必要に応じて、教区での意見聴取で提起された提案の履行に向けた、スムーズな移行を保証することもできます。結局のところ、このシノドスのプロセスは終わりではなく、新たな始まりなのです。

4.5 本シノドスの経験の基本要素

4.4 で挙げた各段階は、指針として使用すべきものです。究極的に教区フェーズには、たとえば 2023 年 10 月にローマで開催される総会のような、シノドス総会と同様の「要素」が含まれています。これらの要素とは、開幕ミサ、全体会の集まり、小グループの分科会、沈黙と祈りの時間、非公式な対話、共有体験（巡礼、芸術表現、また弱者や障害者、高齢者との体験など）、そして閉幕ミサです。これらシノダリティの基本的要素は、第 2 章で概説した原則、態度、落とし穴に留意しながら、地方教会で実りあるシノダリティの経験を育むために、皆さんの現場の状況に容易に適応させることができます。

5. 本シノドスのプロセスを整理するための資料

5.1 教区における本シノドスのプロセスのための方法論

各教区は、過去に声を聞いてもらえなかった人々にとくに注意を払いながら、聖霊に導かれたシノドスの経験を可能にするためにもっとも資する方法を識別することができます。シノドスのウェブサイトには、これをどう進めるかについての助言や資料が掲載されています。

前述のように、個人やグループは、自分が属する地方教会を通じてこのシノドスのプロセスに参加することが推奨されています。しかし、個人やグループがシノドス事務局に直接提出することも可能です（『エписコパリス・コムニオ』6）。

各地方教会内で、地域の状況に応じて、もっとも実りあるシノドスの経験を促進するような方法で集まりを設定すべきです。理想的には、同じグループの参加者のために、複数の「シノドス公聴会」が準備されれば、彼らはより深く、より豊かな対話ができるでしょう。別の方法として、新しいグル

ープを組織することで、より多くの人が、より幅広く多様な意見や経験に耳を傾け、関わるができます。

各個人が聞き取りの意見を教区に直接提出することもできます。諮問に対する個人の提出物については、表明された意見が教区のまとめに含まれるように、適切な情報と資料が適時に配布されるべきです。今回のシノドスのプロセスを共同体として体験することは、ともに歩むというシノドスの精神をよりよく表現するため、個人の投稿より推奨されるべきです。この意味で、動画、ビデオ会議、聖書の分かち合い、祈りが、個人的に提出する人々に提案される可能性があり、それによって彼らはシノダリティの経験とより密接に結びつくようにすることができます。

複数の小教区を集めたシノドス公聴会を開催することは、異なる社会経済的背景、民族、年齢層などから多様な人々を集めるよい方法です。二つ以上の小教区が集まって、一連の合同シノドス公聴会を計画することができます。たとえば、キリスト者として直面している課題や、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中での教会のあり方、それぞれの状況に関連した事象など、共通に関連した経験を中心とした分かち合いに焦点を当てることができます。超小教区の準備チームを結成することもできます。

また、可能な限り、すでに計画されている地域や教区の集まりや会合に、シノダリティのテーマやこのシノドスのプロセスの意見聴取を組み込むよう勧めます。この意味で、今回のシノドスのプロセスの教区フェーズは、2021年から2022年にかけての既存の司牧課題を豊かにすると同時に、何か新しい要素を刺激することができます。

5.2 本シノドスのプロセスの非公式的側面

互いの話に耳を傾け合うことは、互いを知り、生活を分かち合うことによって豊かなものとなります。互いに会って対話を始める前に、共通の活動を行うことは非常に有益です。

一緒に行いうる活動の例としては、巡礼、社会活動や慈善活動、あるいは単に食事をとることなどが挙げられます。参加者相互の信頼関係が深まるだけでなく、知的議論よりも実践的な活動に魅力を感じる人々の参加を促すことができます。

この方法は、イエスが弟子たちを集めて食事をともにしたり、一緒に歩いたり、単に一緒に時間を過ごしたりした例に倣ったものです。参加者が食べ物、飲み物を分かち合うための十分な時間と適切な空間を確保することが重要であり、休憩時間には、形式ばっていない自然な交流の中でお互いの話に耳を傾ける経験を長くとることができます。これにより、堅苦しい会議に馴染めない人々がより実りある参加ができるような扉が開かれ、より自由に、特定の要点について明らかにする機会が与えられます。

体を使う活動、文化活動、社会活動、慈善活動に参加することは、参加者間の交わりを構築し、互いの友情という新たな経験を通して、教会を刷新することに資することができます。

5.3 意見聴取のための主な質問

このシノドスは、次のような基本的問いを投げかけています。

シノドスの教会は、福音を告げながら、「ともに旅をする」のです。この「ともに旅をする」ということは、今日、みなさんの地方教会の中で、どのような形で起こっているのでしょうか。わたしたちが「ともに旅をする」中で成長するために、霊は、わたしたちがどのような段階を踏むよう招いているのでしょうか（「準備文書」26）。

この質問に答える中で、わたしたちは次のように招かれています。

- ・ **自分たちの体験を思い出す**：この質問を受けて、わたしたちの地方教会のうち、どのような体験が思い起こされますか。
- ・ **これらの体験をより深く読み直す**：どのような喜びがありましたか。どのような困難や障害に遭遇しましたか。どのような傷が明らかになりましたか。どのような洞察が得られましたか。
- ・ **実りを集めて分かち合う**：これらの体験の中で、どこに聖霊の声が響いているのでしょうか。霊はわたしたちに何を求めていますか。確認すべき点、変化のきざし、踏むべき段階は何でしょうか。どこでわたしたちはコンセンサスを得ることができるのでしょうか。わたしたちの地方教会にはどのような道が開かれているのでしょうか。

人々がこの基本的な問いをより深く探求するのを助けるために、以下に挙げたテーマは「生きられたシノダリティ」（「準備文書」30）の重要な側面を強調しています。これらの質問に答える際には、「ともに旅をする」ということは、二つの、深く相互関連した仕方で起こることを覚えておくといでしょう。まずわたしたちは、神の民として、互いにともに旅をします。次にわたしたちは、神の民として、全人類家族とともに旅をします。この二つの視点は互いを豊かにし、より深い交わりとより実りある宣教に向けた共同識別に役立ちます。

以下の10のテーマそれぞれに付随する質問は、出発点として、あるいは役立つ指針として使用することができます。皆さんの会話や対話を、以下の質問に限定する必要はありません。

1. 旅の同伴者

教会でも社会でも、わたしたちは同じ道を並んで進んでいます。わたしたちの地方教会で、「ともに歩む」人は誰でしょうか。ずっと離れているような人は誰でしょうか。わたしたちはどのようにして仲間として成長していくよう招かれているのでしょうか。どのようなグループや個人が隅に追いやられているのでしょうか。

2. 聴くこと

聞くことは最初の一步ですが、それには偏見のない、開かれた精神と心が必要です。わたしたちはときに無視してしまいがちですが、神はその声をとおしてどのようにわたしたちに語りかけているのでしょうか。信徒、とくに女性や若者はどのように聞いてもらっているのでしょうか。わたしたちが耳を傾けることの助けと妨げは何でしょうか。わたしたちは、社会の周縁部にいる人々の声にどれだけ丁寧に耳を傾けているのでしょうか。奉獻生活の男女の貢献はどのように統合されていますか。とくに自分とは異なる意見をもつ人々などに耳を傾ける際に、どのような限界があるで

しょうか。とくに貧困、疎外、社会的排除を経験している人々など、少数派の人の声を聞くための空間はありますか。

3. 声に出すこと

勇気と大胆さ、つまり、自由、真理といつくしみを統合して話すよう、すべての人は招かれています。わたしたちの地方教会や社会の中で、勇気をもって、率直に、責任をもって発言することを可能にするもの、あるいは妨げるものは何でしょうか。わたしたちはいつ、どのようにして自分にとって大切なことを語るができるのでしょうか。地元メディアとの関係はどうなっていますか（カトリック系メディアに限らず）。誰が、キリスト教共同体を代表して発言しますか、またその人はどうやって選ばれますか。

4. 祝うこと

「ともに旅をする」のは、共同体でみことばに耳を傾け、エウカリスチアを祝うことに基づいている場合にのみ可能です。祈りと典礼は、実際にどのようにわたしたちの共同体における共有された生活と宣教を刺激し、導いてくれるのでしょうか。もっとも重要な決断をどう鼓舞するのでしょうか。わたしたちは、典礼への全信者の能動的参加をどう促進できるのでしょうか。朗読奉仕と祭壇奉仕に加わるため、どのような空間が準備されているのでしょうか。

5. 宣教における共同責任

シノダリティとは、教会の全メンバーが参加するよう求められている、教会の宣教に奉仕するためです。わたしたちは皆、宣教する弟子であるのですが、洗礼を受けたすべての人は教会の宣教にどのように参加するよう招かれているのでしょうか。洗礼を受けた人が能動的に宣教活動することを妨げるものは何でしょうか。わたしたちはどの宣教分野を無視しているのでしょうか。さまざまな形（社会政治的にかかわり、科学研究、教育、社会正義の促進、人権擁護、環境保護など）で社会に奉仕するメンバーを、共同体はどのように支援していますか。教会は、こうしたメンバーが宣教的な形で社会への奉仕を生き抜けるように、どういった支援をしていますか。宣教に関する選びの識別は、どのように、誰が行っていますか。

6. 教会と社会における対話

対話には根気と忍耐が必要ですが、それは相互理解を可能にします。わたしたちの共同体では対話のために、どの程度、多様な諸民族の人々が集まっているのでしょうか。わたしたちの地方教会内では、どんな場所で、どのような仕方に対話がなされていますか。近隣教区、地域の修道会、信徒団体や運動体などとの連携をどのように進めていますか。ビジョンの違い、対立や困難にどのように対処していますか。どういった教会や社会の特定課題に、わたしたちはより注意を払わなければならないのでしょうか。他の諸宗教の信者や無宗教の人々とは、どういった対話や協力の経験がありますか。教会は、社会の他セクター（政界、経済界、文化界、市民社会、貧困にあえぐ人々）とどのように対話し、そこから学んでいるのでしょうか。

7. エキュメニズム

一つの洗礼によって結ばれた、異なる信仰告白をもつキリスト者間の対話は、シノドスの旅において特別な位置を占めています。わたしたちの教会共同体は、他のキリスト教伝統や諸派のメンバーとどのような関係をもっているのでしょうか。何を共有し、どのようにともに旅をしているのでしょうか。ともに歩むことで、どのような実りを得たのでしょうか。困難は何でしょうか。どのようにすれば、互いに歩みを進める次の段階に進めるのでしょうか。

8. 権限と参加

シノドスの教会は、参加型で共同責任を負う教会です。わたしたちの教会共同体は、追求すべき目標、それに到達する道筋、踏むべき段階をどのように特定するでしょうか。わたしたちの地方教会の中で、どのように権威と統治は行われているでしょうか。チームワークと共同責任はどのように実践されていますか。誰がどのように見直しをしていますか。信徒奉仕職や信徒の責任はどう推進されていますか。地方レベルにおいて、実りあるシノダリティの経験をしてきましたか。地方教会レベルでシノドスの機関（小教区と教区の司牧評議会、司祭評議会など）はどのように機能していますか。どのようにすれば、わたしたちの参加やリーダーシップにおいて、よりシノドス的な手法を発展させることができるでしょうか。

9. 識別することと決断すること

シノドス的な生活様式では、共同体全体を通して聖霊が何を語っているかを識別することによって決断がなされます。意思決定において、どういった方法やプロセスを用いていますか。それらはどう改善できるでしょうか。位階制の組織において、意思決定への参加をどのように促進していますか。わたしたちの意思決定の方法は、神の民全体の声に耳を傾けるのに役立っていますか。意見聴取と意思決定の関係はどうなっているでしょうか、また、これらをどのように実践に移していますか。透明性と説明責任を促進するため、どのようなツールと手順を用いていますか。どのようにして霊的共同識別を成長させることができるでしょうか。

10. シノダリティの中で自己形成すること

シノダリティは、変化、養成、継続学習に対する受容力を必要とします。わたしたちの教会共同体は、「ともに歩み」、互いに耳を傾け合い、宣教に参加し、対話に加わる能力がより高まるように、どのように人々を養成できるでしょうか。シノドス的な仕方で、識別と権威行使を育成するために、どのような養成が提供されているでしょうか。

シノドスのウェブサイトでは、簡便かつ興味をそそる方法で、さまざまなグループの人々にこれらの質問を投げかける方法を提案しています。各教区、小教区、教会グループは、すべての質問を網羅することを目指すのではなく、それぞれの状況にもっとも当てはまるシノダリティの諸相を識別し、それらに焦点を当てるべきです。参加者は、自分の実生活での体験を正直かつ率直に話し、互いに話し合ったことを通して聖霊が何を示しているかを一緒に考えることが勧められます。

謝辞

今回のシノドスのプロセスを準備し、調整し、参加しているすべての人に、心からの感謝のことばを贈ります。わたしたちは聖霊に導かれて、神が3千年期に望まれる教会を築くための生きた石をなしています（一ペトロ 2・5）。使徒たちの元后、教会の母、聖なるおとめマリアが、神が定められた道をともに歩むわたしたちのために執り成してくださいように。わたしたちが互いに交わりを築き、世にあって使命を遂行するとき、五旬祭の2階の広間でのように、聖母マリアの母なる配慮と執り成しがわたしたちとともにありますように。マリアとともに、神の民としてわたしたちはともにこう語ります。「おことばどおり、この身になりますように」（ルカ 1・38）。

教区連絡担当者／チーム

各教区⁶は、今回のシノドスの意見聴取の教区フェーズのため、教区連絡担当者または共同リーダーの役割を果たす1人または2人を選ぶべきです。可能であれば彼らは、自分たちと協力するチームを組織すべきです。

今回のプロセスのシノドス的性格を反映するため、1人の連絡担当者を任命するのではなく、共同リーダーの形が勧められます。互いに学び合い、責任を分かち合い、今回のシノドスのプロセスがもつ創造性と活力を皆さんの教区で豊かなものとするために、共同リーダーの仲間とともに働き、チームと協力することを勧めます。教区連絡担当者／チームの働きには、以下のような一般的役割や任務が含まれます。

- 教区と司教協議会（およびその連絡担当者またはチーム）との間の連絡係を務める。
- シノドスの意見聴取に関し、教区内の小教区やその他教会グループの問い合わせ窓口を務める。
- 今回のシノドスのプロセスに関して、教区司教の主な連絡先となる。
- チームとともにシノドス的な仕方で働き、教区のプロセスがシノダリティに関連するトピックや課題についてどう展開し論じるかという方法を開発し（シノドス事務局と司教協議会が概説しているとおりに）、同様に、教区中から意見を収集、分析し、まとめるプロセスを発展させる。
- すべての小教区に意見聴取のプロセスへの参加を呼びかけ、地方レベルでのシノドスのプロセスに参加するための集まりを組織する。小教区は、他の小教区と一緒にあって、より大きな交わりとともに歩む感覚を促進することができる。教区連絡担当者／チームは、小教区が友愛の精神、共同責任を育て、さらに子ども、若者、独身者、夫婦、家族、高齢者を含む、共同体の聖職者、修道者、男女信徒の、十全で能動的な参加を発展させるよう促すべき。このようにして、意見聴取のプロセスは、地域の社会的・経済的、文化的、民族的な背景や能力の多様性を反映するとともに、カトリック信仰の実践にあまり積極的でない人々、異なるキリスト教諸派や他の信仰伝統の人々、小教区とは無関係の地域社会、市民社会の住民からの意見聴取を促進する。
- 教区内の各奉仕職、運動体、教会団体、部門／事務局を招き、その固有の奉仕職や焦点領域といった優位な視点から、「手引書」と付属の文書に含まれている質問に意見を述べてもらう。これら各グループは、それぞれ独自の意見聴取を行うこともできるし、複数グループが互いに協力したり、教区内の小教区と協力したりすることもできる。教区内のさまざまな使徒職、文化、共同体、グループ、取り組み、エキュメニカル／諸宗教運動など、すべてが意見聴取のプロセスに参加するように努力し、地方教会において、真のシノダリティの経験を育むべき。
- 地方レベル（小教区、諸共同体など）で意見聴取のプロセスを実施し、促進する責任者の人たちに、研修と同伴（研修会、ウェビナー〔訳注：オンライン研修会〕、動画、資料と、人的支援の

⁶ 「手引書」とそれに添付するすべての付録や資料の中で、「教区」という用語は、地方教会全般を指しており、「東方典礼カトリック教会の教区（*eparchy*）」「属人裁治区（*ordinariate*）」、その他、同等の教会組織で置き換える。

両方またはいずれか一方、の形で)を提供し、シノダリティの意味、今回のシノドスのプロセスの目的、彼らが育てようとしているシノドス的体験の特徴を理解できるように支援する(詳細は、「手引書」またはシノドスのウェブサイトを参照)。

● 教区中の意見聴取のプロセスからの意見を受け取る方法を開発し、このプロセスを小教区、教区のグループ、修道会、運動体に伝え、「可能な限り幅広い参加」を得るようにする。これには次のことがらが含まれる。

○ 小教区／諸共同体が、意見聴取を実施するため、各自の連絡担当者／チームを任命するよう提案すること。

○ 小教区／諸共同体が、その現場の人々と1、2回、またはそれ以上の公聴会を行うよう提案すること。小教区／諸共同体は、特定のグループ(たとえば、青年、若い成人、夫婦、移住者や難民、信仰にあまり実践していない人、貧困や疎外を経験している人)のために、特別の公聴会の開催を望むかもしれない。

○ 小教区が各意見聴取／対話をまとめ、記録する方法を見いだすよう提案すること(秘書や記録係を置く、会議を電子媒体で記録する、参加者や世話人が記録をオンラインにアップロードする、その他の手段を用いるなど)。

○ すべての意見を教区連絡担当者／チームに送る締切日と、そのプロセス／方法を決めること。

○ 意見聴取のプロセスの後、参加者やそれ以外の人と集まり、提供された意見に関して、フォローアップするために何が行われてきたかを分かち合い、地方レベルでシノダリティの精神と様式を統合するための次のステップを識別するよう勧めること。

●意見聴取の期間中、各小教区／共同体を定期的に訪れ、支援、励まし、同伴、そして繰り返しの感謝を、その途中で伝える。

●各地の意見聴取で得られたまとめ、意見、洞察を遅滞なく収集する。

●教区シノドス前会議の開催を監督する(付録C参照)。

●集められた情報を分析してまとめ、最大10ページの「簡潔な教区のまとめ」を作成、その後、所定の期限までに司教協議会に伝える。このまとめは、教区連絡担当者と働いているチームが、司教とその指名者の両方またはどちらか一方と協力して作成すべき(付録D参照)。

●教区のまとめは、遅滞なく司教協議会に送付される。

教区連絡担当者とチームは次のような資質を持つべきです。

● 生き生きとした信仰をもち、霊的に成熟した人。

● 気取らない協力者。

● 効果的にコミュニケーションがとれる人。

● さまざまな情報をまとめる能力。

● 多様な文化、世代、教会的背景をもつ人々とうまく交流できる能力。

● 教区組織と作業手順に精通していること。

● 過去に、協力が必要な取り組みやシノドスのプロセスで働いた経験。

● 共同リーダーとチームの両方またはどちらか一方と働く際の謙虚さ、他者の洞察力やたまものに対し寛容に開かれていて、新たな作業手順に挑戦しようとする。

教区連絡担当者は聖職者である必要はないことに留意すべきです。共同リーダー制の形式をとる場合、共同リーダーのうち1人は男性、1人は女性であることが強く勧められます。少なくともそのうち1人は信徒であるべきです。

教区連絡担当者と協力するチームは、教区の多様性を反映し、教区の主要なリーダーを含めるべきです。つまり、異なる文化、世代、背景をもつ信徒男女、聖職者、修道者で、教会の多様な奉仕職とカリスマ、とくに若者、家庭、移住者と難民、貧しい人々との教区司牧活動を代表している人々のことです。もしチームのメンバー内に、以前または最近、地域、教区、全国のシノドス的プロセスか、同様の試みに携わったことのある人がいると助かります。

シノドス公聴会を運営するための推奨ガイド

シノドスの公聴会は、小教区内のさまざまなグループ間で、あるいは異なる小教区から多様な人々を集めて組織することができます。他の教区機関や修道会、信徒団体が協力して公聴会を開催することもできます。以下は、取るべき手順の一般的概要です。

1. **運営チーム**を結成し、人々のところへ出向いていくための方法や、本物のシノドス体験の中で
の対話と参加を促進するためにもっとも適切な方法を識別することを含め、地域レベルでの意見
聴取のプロセスと集まりを計画、実行します。
2. **参加**は、小教区でのお知らせ、SNS、手紙などで促すことができます。学校や地域センター
といった教会施設だけでなく、地域の近隣住民の協力を得て、しばらく教会共同体と定期的に接
触していなかった人々を特定し接触するため、特別な努力を払うことができます。排除されてい
る人々や、その声がほとんど考慮されない人々を巻き込むように配慮すべきです。
3. 参加者には、**多様な**共同体、経験、文化、年代、職業の人々が含まれていることが理想的で
す。グループ全体の規模は、利用可能な会場や世話人の数次第です。
4. 集まりの約 2～3 週間前に、祈りと考察のための**準備資料**を参加者全員に送付します。これら
の資料には、シノダリティに関する簡単な背景資料、考察のための主な質問、これらの質問につ
いて祈り識別するための推奨方法（推奨される聖句を含む）が含まれるでしょう。参加者は、
シノドスの会議で用いられる方法についても知らされるべきです。実りある対話のために重要で
あるので、これらすべての資料を使って個人として準備する時間を確保すべきです。
5. 主な、**考察のための質問**は、関連性があり、簡潔でなければなりません。表面的にしか扱われ
ない多くの質問があるよりも、深く掘り下げられうる少ない質問の方がよい場合が多いのです。
今回のシノドスは、次のような**基本的質問**を投げかけます。「シノドスの教会は、福音を告げなが
ら、『ともに旅をする』のです。この『ともに旅をする』ということは、今日、みなさんの地方教
会の中で、どのような形で起こっているのでしょうか。わたしたちが『ともに旅をする』中で成長
するために、霊は、わたしたちがどのような段階を踏むよう招いているのでしょうか」。（「準備文
書」 26）

この質問に答えることで、わたしたちは以下のように導かれます。

- － **自分たちの経験を思い起こす**。地方教会でのどのような経験を、この質問は呼び覚ましま
すか。
- － **これらの経験をより深く読み直す**。どのような喜びがありましたか。どのような困難や障
害に遭遇しましたか。どのような傷が明らかになりましたか。どのような洞察が得られまし
たか。

－ **果実を集めて分かち合う**。これらの経験のどこに聖霊の声が響いていますか。聖霊はわたしたちに何を求めていますか。確認すべき点、変化のきざし、踏むべき段階は何ですか。どこでコンセンサスを得ることができますか。わたしたちの地方教会にはどのような道が開かれているのでしょうか。

参加者が自分の地域共同体のこれまでの歩みを振り返ることは、しばしば非常に有意義なことです。その共同体の信仰生活の歴史はどのようなものだったのでしょうか。現在地に、どのようにたどり着いたのでしょうか。神はどのように現存していたのでしょうか。過去をともに振り返ることは、しばしば共同体を築き上げ、その進むべき道を導くのに役立ちます。

人々がこの基本的質問をより深く探求するのを助けるために、「生きられたシノダリティ」（「準備文書」30）の重要な側面を強調する10のテーマが考案されました。10のテーマのそれぞれに付随する質問は、意見聴取を充実させるための出発点として、あるいは有用な指針として使用することができます。これらの質問は、「手引書」の第5章に掲載されており、より詳細なバージョンは、シノドスのウェブサイトの付属資料に掲載されています。

6. 選択された意見収集の方法と形式に応じて十分な数のグループ世話人がいること、そしてプロセスを実施するために十分な準備がされていることを確認する必要があります。また、意見聴取のまとめを準備するチームを定めておく必要もあります。

7. 集まりでは、共同体による祈りと典礼が重要な役割を果たします。互いに耳を傾け合うことは、神のみことばと聖霊に耳を傾けることに基づいています。意味深い祈りの形式を用いて、神の導きと息吹を求め、神に互いの交わりを深めてもらうことができます。典礼や、聖書をともに黙想することは、この点で非常に役立つ手段です。

8. シノダリティの原則に共鳴するグループでの対話のための適切な方法を用いることができます。たとえば、霊的会話法は、能動的な参加、注意深い傾聴、内省的な発言、霊的な識別を促すものです。参加者は、さまざまな背景を持つ6～7人の小グループを作ります。この方法は、最低でも1時間かかり、3回で構成されます。1回目は、全員が等しく順番に、事前に配布された振り返りの質問（本付録の5. 参照）に関連して、自分の祈りの成果を分かち合います。この回では、議論は行わず、参加者全員が一人ひとりの話に注意深く耳を傾け、聖霊が自分の中で、話している人の中で、そしてグループ全体の中で、どのように働いているかに注意を払います。続いて、自分の内面の動きに注意するための沈黙の時間が設けられます。2回目に参加者は、1回目にもっとも印象的だったことや、沈黙の時間に心が動かされたことを分かち合います。対話しても構いませんが、同様の霊的配慮が必要です。その後、再び沈黙の時間が設けられます。最後に、3回目に参加者は、会話の中で何が響いてきたのか、何がもっとも深く感動したのかを反すうします。新たな洞察や未解決の疑問点なども指摘します。会話の最後に、自然発生的な感謝の祈りで閉めることもあります。通常、各小グループには世話人と記録者がいます（このプロセスの詳しい説明はシノドスのウェブサイトに掲載されています）。

9. グループでの対話が行われた後、参加者は小グループでのプロセスの経験について振り返り、分かち合います。自分の経験はどうだったでしょうか。浮き沈みはありましたか。どのような新しい、あるいは新鮮な洞察を発見したでしょうか。シノドスの進め方について何を学びましたか。ともに過ごす時間の中で、神はどのように現存し、働いておられましたか。

10. それから参加者たちは、運営者／世話人チームに伝えたい意見を決定します。「手引書」の第4章に概説されている教区のまとめのための指針となる質問は、地域レベルでの意見のための基礎として用いることができます（付録Dも参照）。

11.そこで参加者全員は集合して、集まりを締めくくることができます。各小グループの代表者が、そのグループの体験について簡単に分かち合います。参加者は、自分の意見が教会全体にどのように貢献するかを知るために、今回のシノドスのプロセスの次の段階について説明されます。集まりは、感謝の祈りや歌で締めくくることが勧められます。

12. 集まりの後、運営者／世話人チームのメンバーは、全体の経験を見直し、すべての小グループから提出された意見に基づいて、まとめを準備するために会合をもつことができます。そこで、彼らはそのまとめを教区連絡担当者へ送付することができるのです。

13. 対面やオンラインで、その集まりに参加できない人がいる場合、メール、電話、無線、その他の適切な手段で連絡を取るように努力してください。すべての人、とくに社会から疎外されている人の声に耳を傾けるために最善を尽くすことが重要です。

その他のリソースについては、シノドスのウェブサイトを参照してください。

教区シノドス前会議

各地方教会は、教区フェーズの最後に、教区シノドス前会議を行います。この集まりは、教区の多様なメンバーがミサに集まり、ともに祈り、教区での今回のシノドスのプロセスの体験を振り返り、教区内のシノドスの公聴会から出てきた意見に耳を傾け、地方教会の現在の現実と時のしるしについて対話し、シノダリティの道を歩む教区への聖霊の呼びかけを識別する機会を提供するものです。教区フェーズにおける意見聴取のプロセスの多くは、小教区、奉仕職、その他の教会グループなど、地方教会の特定の共同体の中で行われていたかもしれませんが、教区シノドス前会議の目的は、少数派のグループや周縁部の人々を含む教区「全体」の代表的な「横断面」を集め、参加者たちがともに祈り、耳を傾け、内省し、識別することにあります。この集まりの後、教区シノドス前会議の結果は、教区中のシノドス公聴会から出てきた意見とともに、教区のまとめの一部となるべきです（教区のまとめの詳細については、付録 D 参照）。

目的

- a. 神の民からのシノドスの意見聴取という、数カ月にもわたる教区フェーズの集大成とする。
- b. シノドスの道をともに歩む教区の旅の新たな現実と経験を祝い、振り返る。
- c. 教区内のさまざまな共同体から選ばれた代表者のグループとの教区の意見聴取から出た、主要なテーマを強調する。
- d. 多様な共同体（小教区、奉仕職、運動体、学校、聖職者、修道会、疎外された人々、若者、文化的グループなど）のメンバーに参加してもらい、教区全体から寄せられた意見に基づいた教区のまとめの視点から、意見聴取のプロセスの体験と情報について振り返る。
- e. 教区の人々を通して、神が語ってこられたことに耳を傾け、地方教会に対する神のみ旨と、より深い交わり、より完全な参加、より実りある宣教に向けて神が招いておられる、教区内で教会が進むべき道筋を識別する。
- f. 最優良事例、シノドスの道筋を明らかにし、そして、ともに旅をし、互いに耳を傾け合い、共同責任を負う、よりシノドス的な教会となるための新たな勢いと活力を引き出す。
- g. 教会全体の今回のシノドスのプロセスへの貢献として、教区内の意見聴取のプロセスで神の民が分かち合ったことを伝える、教区のまとめを作成すること。

参加者

このシノドス前会議の参加者は、教区の地域的な状況によって異なります。教区は、人口規模、地理的距離、利用可能な資源、人々の文化的背景などに応じて、このガイドラインを適応することができます。理想的には以下のメンバーで構成されるべきです。

- ・ 教区司教、補佐司教、教区連絡担当者／チーム
- ・ 貧困を経験している人、高齢者、少数民族、孤立した人、障害のある人など、その声が十分に届かないことが多い人々
- ・ 信徒のリーダー（さまざまな奉仕職や教区機関で働く男女、若者）
- ・ その他の信徒（小教区や他の教会組織から招かれた男女、若者）

- ・ 聖職者（教区司祭、修道会司祭、助祭など）
- ・ 奉獻生活者の会および使徒的生活者の会のメンバー（カリスマの多様性を反映して）と、使徒職団体、慈善活動団体のリーダー
- ・ 関心のある、エキュメニカル・諸宗教からの代表者（さらに、カトリック信者ではないが、教会に有益な視点を提供できるであろう人）
- ・ 世話人や、教会論に関する司牧的または神学的専門家といった、会議に必要な専門技能をもつ人

教区シノドス前会議の議題と形式

この集まりの議題は、教区におけるこれまでのシノドスの旅を祝い、教区全体の意見聴取のプロセスから得られた意見を振り返り、教区内の神の民の傾聴と識別の成果を表す、教区のまとめの策定に向けて前進することです。この教区のまとめは、司教協議会に送られる教区からの貢献となります。

この集会の形式は、司教および教区連絡担当者／チームとの識別の中で、教区の状況に応じて上記の目的を最も効果的に追求できるように組織されます（さらなる示唆と資料についてはシノドスのウェブサイト参照）。教区フェーズをミサで締めくくり、経験したことを神に感謝し、これからの旅に聖霊の導きを求めることが強く勧められます。集まりの他の要素をどのように配置するかは、各教区で識別できます。教区連絡担当者は、教区内の意見聴取のプロセスから受け取ったすべての意見をまとめる責任があります。教区フェーズを締めくくる集まりで、これら意見を参加者に発表できます。

オンラインまたは混合でのシノドス前会議（e-シノドス前会議）の実施可能性

地方での公聴会や、教区全体のプロセスを締めくくる教区の集まりのために、オンラインまたは混合での会議を準備することが必要であったり、助けになる場合があります。とくに新型コロナウイルス感染症のパンデミックの最中には、オンライン会議や、対面式とオンライン会議の組み合わせは、効果的な選択肢となります。これらのオンラインまたは混合での会議が、祈り、交わり、そして互いと聖霊に注意深く耳を傾ける精神の中で行われるよう、特別な注意が払われるべきです。世話人や司会者は、技術があまり使いこなせなかったり不慣れな人も含めて、すべての参加者が貢献し、自分の声を聞いてもらえるようにする必要があります。

オンラインまたは混合での会議（e-シノドス前会議）における若者の役割

教区がこれらのe-シノドス前会議の計画と実行に若者を招き入れ、異なる年齢層の多様な必要性を念頭に置いて、全参加者が利用可能で使いやすいものにする創造的方法を模索するよう勧めます。

SNS、仮想空間技術、双方向技術のようなツールは、より多くの人々のところまで届き、回答を集めて教区連絡担当者／チームに渡すために大いに活用することができます。若者たちは、このような取り組みに創造的かつ効果的に貢献する上で、重要な役割を果たすことができます。

教区のまとめを準備する

教区のまとめは、教区内の神の民全体の識別の主要な成果を伝えるものです。これは、10 ページ以内の文書にまとめられるよう推奨されています。参加者の経験や意見を引き出すのに役立つ場合は、画像、動画、物語、芸術表現、個人的証言など、その他資料を添付して提出することができます。

教区のまとめは、表明された視点や意見の多様性を反映し、肯定的なものも否定的なものも含めて、参加者の生きてきた経験にとくに注意を払うべきです。まとめは、一般化された、あるいは教義的に正しい一連の声明ではなく、人々の声に、そして彼らの識別と対話から生まれたものに忠実であるべきです。互いに相反する意見を省略する必要はなく、そのまま認めて記載されうるものです。また、少数の参加者によって表明されたという理由だけで、見解を除外してはなりません。実際、「少数意見」と呼べるような視点が、神が教会に伝えたいことの預言的あかしとなりえるのです。

まとめの内容は、提案として示されている以下の質問にしたがって整理することができます。その目的は、教区の人々の間で行われたシノドスの経験と識別がもたらした多様な成果、洞察、喜びと課題を適切に伝えることです。

- ・ 意見聴取のプロセスに関して、教区内で行われた主な段階はどのようなものでしたか。主な質問は何でしたか。可能な限り多くの参加者を集め、周辺部にいる人々にも出向いていくためにどういったことが行われましたか。教区内のおよそ何割の人が何らかの形で参加しましたか。とくに注目すべき参加者グループがありましたか。何らかの理由で参加しなかったグループはありますか。
- ・ 意見聴取の体験全体の中でもっとも重要だったことは何ですか。もっともうまくいったこと、駄目だったこと、慰められたこと、すさみとなったことは何ですか。どのような心性、態度、感情が注目されましたか。聞き取りのプロセスで、どのような緊張や意見の相違が生じましたか。どういったトピックや課題から多様な見解が生まれましたか。全体として、この体験を通して聖霊がもたらした実りは何でしたか。
- ・ 各地の集まりからの意見の中で、とくに重要だったもの、驚いたもの、予想外だったものは何でしたか。どのような新しい視点、新しい地平が開かれましたか。とくに感動した話や実生活での体験は何で、どうしてそうなったのでしょうか。どのような視点に強い共感を覚えましたか。あまり言及されなかったものの、興味深く注目に値する視点はどれだったのでしょうか。
- ・ 現状の光と影を含めた、地方教会におけるシノダリティのいまの現実に関して、全体として、共同体が何を見るよう、聖霊は促していますか。その霊的生活、文化、態度、組織、司牧実践、人間関係、宣教活動の中で、教会が癒しと回心を必要としている領域について、参加者はどのような意見を述べなければならなかったのでしょうか。

- ・ 地方教会はどのような方法でシノダリティの中で成長するよう、聖霊は招いているでしょうか。参加者は教会に対してどのような夢、望み、大志を抱いていましたか。参加者からの意見に基づいて、教区はよりシノドス的な教会になるために、どんな段階を踏むべきだと感じていますか。教会全体との交わりの中で、教区がシノダリティの道を進むための次の段階は何ですか。

- ・ どのような文化的イメージが、わたしたちのシノダリティの経験を明確に表していますか。

まとめの作成は、大規模な集まりではなく、少人数のチームで行うよう勧めます。このチームは、教区司教および教区連絡担当者と協力してその任務を遂行します。このチームは、祈りの精神ですべての提出物を読むべきです。チームの会議自体は、聖霊の導きのもと、教区中の神の民の生きた声に耳を傾けながら、シノドス的かつ霊的に識別するものでなければなりません。

各教区は、教区シノドス前会議の成果が教区のまとめに反映される限りにおいて、そのまとめを教区シノドス前会議の前に準備するか、後に準備するかを選択できます。可能な限り、自分の声がまとめに反映されたと全員が感じられるようにすべきです。透明性の模範として、起草チームのメンバーや、意見をまとめるプロセスをすべての人に知らせることができます。シノダリティの道を歩む教区の旅の試金石として、ひとたびそれが起草されたら、そのまとめを公開することを強く勧めます。できる限り、教区のまとめ案が正式に司教協議会に送られる前に、神の民がその内容を検討し、回答する機会を与えることができます。